

始



1548

911.38
Su96



俳人鬼貫の研究

文學博士 藤井乙男 序
文學博士 吉澤義則 序
文學士 鈴木重雅 著

共立社刊行

大正
15.12.23
内交



大徳の言はきくはるかに
かしらにやまのうたを
聞きしをよ
振舞ふはま
之用子 鬼印

鬼貫の筆蹟 伊丹 岡田利兵衛氏藏

松井宗旦の筆蹟

A vertical strip of calligraphy in cursive style, containing several lines of text.

松井宗旦の筆蹟

鬼貫の筆蹟

A vertical strip of calligraphy featuring large characters '鳥来' at the top, '鬼貫' in the middle, and '油榎' at the bottom, with smaller characters in between.

鬼貫の筆蹟 伊丹 岡田利兵衛氏藏

鬼貫の筆蹟

A vertical strip of calligraphy with several lines of text in cursive style.

鬼貫の筆蹟 伊丹 岡田利兵衛氏藏

おのれがの書
一巻の巻
新定
祝
冠
本
音
藤

鬼貫の筆蹟 伊丹 岡田 利兵衛氏藏

鹿嶋の
 竹田の
 常盤に
 遊ん
 だ
 事
 記
 念
 冊
 贈
 呈
 文
 字
 龍
 虎
 宛

鬼貫の筆蹟 池田町 稻東 猛氏藏



伊丹
墨染
寺

墓の郎太永、子のそ及貫鬼

序

談林の軽口もや、鼻につきて、芭蕉は古池の水音に耳をすまし、鬼貫はまことの外に俳諧なしと眼を開きしも、科戸の風の吹き變り、八潮路の潮のさしくる時に會へるなるべし。芭蕉の幽雅、鬼貫の放曠、その風格おのづから異なれども、共に独自の境地を占めて、たやすく人の追隨をゆるさざるものあり。鬼貫がまことの悟はさる事ながら、まことなるもの、やがて皆俳諧ぞと思ひけるにや、野夫村童が日常茶飯のたゞ言に過ぎぬ句の、多く見ゆるは聊か飽かぬ心ちもすめり。さはいへ、口語、小唄、いひさしなどの調子に、談林蕉風をつきませて、えならぬ輕みを見せ、恬淡にして市氣なきは、あぶらこき上方にはめづらしき作者といふべく、彼の五子とあがめ尊びし蕪村以後、我も亦ひいきの一

人ぞといふものは

序

二

藤井紫影

序

義「鬼貫のまこと説は歌道と關係がありはしないだらうか。

重「鬼貫は有賀長伯と往來してゐたから、或はさうかもしれない。

義「長伯にさうした考があつたか無かつたか調べて見たことも無いが、靈元天皇にはそれがあつたまことといふ言葉はお用ひになつてゐないが、さういふお考は持つておいでになつて、實陰通躬光榮などいふ堂上派歌人の間には、自然このお考が傳はりもし廣まりもしてゐた筈と思ふ。鬼貫のみならず、芭蕉の眞劍な心持にもそれと通ふところがあるのでほあるまいか。

鈴木君は變人といはれるまでに、一人學窓にとちこもつて、學生中も卒業後も、たと一人の愛兒——鬼貫の研究——を撫育しつゞけてゐた。それが目鼻立もあざやか

序

三

…………… 序 ……………

四

に成人した喜びを抱いて、私の寓居をおとづれたのは、年の暮もおしつまつた十二月二十一日であつたとおもふ。

折しも私は殆ど絶食の状態で病床に呻吟しながらも、君と交換したのが、右の會話であつた。それをそのまま序にかへて君に送る。

大正十五年一月

吉澤義則

序

芭蕉の俳諧は、元祿文學の精華也。門葉繁衍、兒童走卒と雖、其名を記せざる莫し。鬼貫は、古風談林の俳風に慊らず、芭蕉に先だつて、夙に清新なる一體を創め、上、寛文延寶の俳弊を匡ひ、下、安永天明の新風を開く。その功、固より芭蕉の下に在らず。しかも、資性真率、洒洒落落、聞達を求めず、當世に意なし。その人逝いて、その名混ぶ。予、その人没して、その名稱せられざるを悲み、不敏自ら揣らず、聊か駑鈍を竭して、これが傳を編し、以て千載知己の意を濟すといふ。知らず、この翁果して、地下に肯くや否や。

大正十五年極月初五

鈴木重雅識

…………… 序 ……………

五

鬼貫の墓

二百年の苔むす墓を秋の風
親子ふたり寢覺寒かる秋の風

鬼貫は、晩年は餘程窮迫したものでらしい。鬼貫歿しても別に墓を營むことも出来なかつたと見えて、その子永太郎の墓の側面に戒名を刻してある。この一基の墓石の下に父子二人とこしへの眠についてゐるのである。

例言

不肖が、鬼貫の研究に志したのは、大正十二年の夏、即ち京都大學在學中で、二年生の時であつた。爾來、四春秋は、夢の如く流れ去つたが、短才淺識、疏懶碌々、研究、續あらずして、荏苒今日に及んだのである。しかも、資料佚亡に歸して、見得ざるもの多く、従つて、幾多の疑團の容易に窺知すべからざる者甚だ多いので、此は、更に大方の研究に俟たなければならぬ。著者未だ、白面の一書生のみ。本書、杜撰なる點は、頗る多からうと思ふ。博雅の士、幸に垂示を吝まれざらば、幸これに過ぎたるはない。

本研究に於ては、寧ろ傳記の方に力を注いだ。それは、文學の研究上、その人と、その作品とは、離して考へることは出来ないものであるが、鬼貫に

於ては、その傳記が朦朧としてゐるので、まづ、出来るだけ、之を闡明し、然る後、その作品に及ぶべきであると思つたのである。併し、それは、至難の事業で、その根本的の解決に至つては、前途茫洋、一朝一夕になしうることではない。また、とても不肖等のよくする所ではない。依つて杜撰を願みず、之を公にすることになつたのである。

本研究は、實は、昨年の夏より着手し、初冬の頃、脱稿した。直ちに、上梓すべき筈の處、事情あつて、漸く、今冬、剗剗に附することゝなつた。今にして思へば、舊稿に對して、不満なところは、甚だ多い。殊に、その傳記の部分に於て然りである。が、今となつては、訂正する餘裕を失つてしまつて、それも出来ぬ。唯、年表の部分だけは、新たに得た材料によつて少しく訂正を加へて置いた。本文と年表と相違する點があるのは、その爲めである。

恩師藤井紫影博士は、本研究に對し、貴重なる資料を貸與せられ、懇篤なる指導と示唆を賜ひ、本書の出版についても、先容の勞を執られ、且つ序文をも寄せられ、恩師吉澤義則博士よりも、亦種々垂教を蒙り、序文を與へられたことは、惓謝の至であります。尙、文學士稻束猛氏、文學士岡田利兵衛氏は、藏幅の撮影を許され、墨染寺老師は、鬼貫の墓の撮影を許され、奇二治郎兵衛氏は、貴重なる資料を提供せられ、市橋桂溪氏は、これが謄寫に當り、且つ有益なる教示を與へられ、勝峰晋風氏は、在岡逸士傳等を貸與し、また、高教を垂れられ、岡本圭岳氏も種々便宜を計られた。また、最近、藤村作博士、萩原蘿月氏の御好意により、東京大學國文學研究室なる洒竹文庫の藏架に係る珍籍の披見を許され、發明する所少くなかつた。その際、同研究室の池田文學士よりも色々便宜を與へられた。大方諸位、懇情殷々、謹んで感謝

……例言……

一〇

の辭を捧げる次第であります。

烏兔匆々、本書、稿成つてより正に期年、霜は荆門に下りて、天漸く寒く、籬畔の山茶花、仄かにかほる頃となつた。年窮歳盡、本年も餘すところ、僅に三旬、寒夜手爐を擁して、既往を懷へば、感轉、無量なものがある。

大正十五年十二月五日

鷹取山下、駐春書屋に於て

鈴木重雅識

俳人鬼貫の研究 目次

鬼貫時代の年表……………(一—九)

第一編 序 論

第一章 鬼貫と其の時代……………一

第二章 鬼貫に關する資料……………一〇

第二編 本 論

第一章 鬼貫傳……………三

一、系傳・父母・妻子・その他……………三

二、伊丹を去る(青年時代)……………五

……目次……

一

……………目

次……………

二

1、柳川 2、郡山 3、大野

三、大阪に移る(壯年の時代)……………三二

四、京都に住す(中年の時代)……………三六

五、再び大阪に歸る(晩年の時代)……………二九

六、旅行……………三三

1、江戸行 2、美濃加納行

第二章 師友門流……………一四

一、師 承……………一四

二、朋 友……………一五

三、門 流……………一七

第三章 鬼貫の人物……………一八〇

第四章 鬼貫の作品……………二〇七

一、序 説……………二〇七

二、俳 論(俳論の解説及び評論)……………三三

1、句の内容に就いての論……………三三

A、まことの意義……………三三

B、まこと説の由来……………三五

C、まことと句との關係……………三八

2、句の形式(修辭)の論……………三七〇

三、鬼貫の句……………三七九

1、句の形式……………三七九

A、用語……………三七九

B、句法……………四〇

C、句調……………四三

D、文法……………四六

2、句の内容……………四六

……………目

次……………

三

第三編 結論 四二

第四編 鬼貫の俳諧史上における影響 四三

附録 大悟物狂 四七

補遺 五三

一、系傳 五六

二、住所・祿仕 五二

三、上島家と墨染寺との關係 五八

四、鬼貫の家 五八

五、宗旦の句 五九

六、鬼貫の句 五三

七、鬼貫の娘の有無 五七



鬼貫年表

()内ノ書名ハ原據ヲ示ス。()内ノ號ハソノ號
ヲ用キタルヲ示ス

年	號	鬼貫 年齢	摘	要	參 義 事 項
寛文	一	1	糸海に出生(七車序)		其角丈草生
	二	2			芭蕉十九歳藤堂家に出仕
	三	3			關水生
	四	4			重頼佐夜中山集に芭蕉の句初見
	五	5			支考生
	六	6			蟬吟歿
	七	7			芭蕉出郷(?)
	八	8	こひくといへど螢がとんで行(七車)		
	九	9			

延寶										
八	七	六	五	四	三	二	一	十二	十一	十
20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10
		俳諧の書(慧能録?)獨吟の書を著す。 (七車序)		宗因門に入る(ひとりごと)	俳諧すさびを著すといふ。		重頼門に入る。梅翁の風も學ぶ。俳席に列る(七車序ひとこと)			
重頼歿。無分別(宗因)田舎句		夕霧歿。大阪淨國寺に葬る。		芭蕉歸國。上洛。	宗因江戸に下り、十百韻興行。	淡々生。宗旦の無分別鶴のまね、遠山鳥出づ。	談林風流行。芭蕉杉風の庵に入る。	芭蕉東下、二十九歳。	來山立机、十八歳。	

貞享				天和		
四	三	二	一	三	二	一
27	26	25	24	23	22	31
柳川の洲へ都の客と馬刀とり、柳川に住へしはこの頃や。	大阪住。貞享四年の春。月難波に歸る。この頃、大坂に住す。	季夏始めて東武に赴く(大悟物狂)七月難波に歸る。この頃、大坂に住す。	「ま、この外に俳諧なし」と悟る。(獨言)			西瓜三つ刊。俳諧は狂句作意をいふとのみ心得たるばかり一概にかたよるべき道にもあらず猶深き奥もやあらむ(獨言)とて迷ふ。
芭蕉鹿島に月を觀、又西上す。宗旦の野梅集出づ。	初懐紙、春の日成る。古池やの吟あり。	芭蕉、京尾張を経て歸京。	八月芭蕉歸郷。冬の日成る。宗旦の加様に候者は出づ。西鶴二萬三千五百句を吐く。	宗旦の三人蛸出づ。	三月廿八日宗因歿、大阪西福寺に葬る。言水江戸より上洛。芭蕉を深川の庵に植す。芭蕉庵炎上。甲斐に遊ぶ。	合常盤屋句合、延寶二十歌仙其他俳書の刊行多し。 立志(一世)歿 芭蕉、枯枝に鳥のとまりたるや秋の暮の吟あり。

元祿		
一	28	芭蕉吉野高野須磨明石、近江美濃尾張木曾路を経て歸東
二	29	鐵卵歿。芭蕉東北行脚。あら野成。
三	30	芭蕉二月伊賀へ向ひ、更に近江幻住庵に入る。ひさご成る。生駒堂刊。宗旦の無盡藏出づ。
四	31	芭蕉嵯峨にあり、又近江に至り十月東下。猿蓑成る。
五	32	芭蕉庵再興。伊丹生俳諧刊
六	33	松井宗旦歿。西鶴歿。
七	34	芭蕉歿。炭俵刊。
八	35	惟然九州行脚、風羅念佛を唱ふ。
九	36	浪化上落。
十	37	

元祿

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

柳川を去れるは此頃によ。

天満より沙津橋附近に轉居。之道の幻住庵行を送る。大悟物狂、犬居七刊。

馬樂堂と改む。(佛の兄序)郡山に仕ふ。

大阪堀川に住す。高すなご集に序す(七車、馬樂堂)

再び東武に下る(七車)

永太郎生。(七車、亡子を悼し詞)郡山を退き伊丹にかへる。

印南野(千山)に入句。

佛の兄に序す、佛兄と號す(佛の兄序)。小町の像を今大路光成より譲られ俳諧興行

花のいろはからびはてたる冬木立
冬梅の身にあまりたる句かな

『法屋宗旦七回忌を悼む詞』成る(七車)

永太郎歿。亡子を悼し詞『六玉川讚』成る(七車、佛兄)

荒小田跋成る(佛兄)正月十五日亡子が一回忌に。去年より物一時も忘れぬの句あり。ふたつものに入句。

古園俳格跋成る。(七車、犬居士鬼貫)貞徳五十年忌に、なきを霜死なば名はなし若翁 三河小町花の雲に入句

實花集に序す(六車)京都に在り、涼菟の北國行を送る。玉腕子に句を與ふ。永昌坊に移居。

尙、京都に在り。寸の字集、郭公卷に序す。四十五になりける元日

續五論(支考)俳諧問答(許六)出づ。

三千風鴨立澤に碑を立つ。

貞因歿。三千風仙臺に遊ぶ。來山十萬堂をたつ。

來山母歿。千葉、鬼貫を訪へること桑岡集に出づと云。未見。

浪化、去來亭に入る。花の雲(千山)。花見車(轍士)。二葉集(惟然)出づ。

由平文章歿。山中集成。

寶永

十一	33		
十二	39		
十三	40		
十四	41		
十五	43		
十六	43		
一	44		
二	45		

三	46	花といはさ老の五のかぶりほろ(七車) 也雲軒宗旦懷蕪 常に思ひ常に向ふめぐりて十三のこ としになれば さもこそ香さへきくさへいつもさへ 芭蕉十三回忌の双林寺に行はるゝに際 し、出座し、追善の句あり かけまはる夢や焼野の風の音	支考芭蕉十三回忌を營む。東 山萬句成る。 後村京に入る。 來山の弟歿。
四	47	文臺記成る(七車)	來山妻歿。嵐雪歿。
五	48	大日理右衛門におくる詞成る(七車)	風水歿。惟然美濃路にて振袖 を着る(?)
六	49		西吟歿。惟然坊行燈をつけて くらがり時を越ゆ(?)
七	50	東山院の大葬を拜して 御車はやみの月夜のなくれ哉 何の姿に序す。(鬼貫、七車) 五十賀 又五つ走つても光れ星の秋(七車)	
一	51	五月十三日蟻道身まかりけるを聞き て十九日おくる 竹の穂はむかしの馬の夢路哉	
二	52	蟻道一周忌に手向る詞成る(鬼貫、七車)	北枝、舍羅を訪ふ。

正徳

享保

三	53	羨鳥の花橋に入句。	鉢扣刊
四	54	伊丹發句合跋成る(權花居士鬼貫)	伊丹發句合(月尋)成る。俳諧 十論(支考)成。
五	55		月尋春澄惟然歿
一	56	江戸筏、老の寢覺の序成。(七車)大阪 に在り。	來山歿 蕪村生
二	57	遠千島に序す(權花翁おにつら、七車)	太祇生、素堂涼菟歿。
三	58	ひとりごと刊。	
四	59		涼袋生。
五	60	小町の像を九間に與ふ(鬼貫、七車)	
六	61		
七	62	七車刊	今宮草刊。言水歿。
八	63	言水一周忌に句を送る(鬼貫、七車)	在岡隱士傳成。

元文			二十
三	二	一	75
78	77	76	祇空句選に入句
八月二日大阪鯉谷に歿す。法號仙林即翁居士。伊丹墨染寺に墓あり。			貞柳歿。
正月四日市貢歿。			才廣歿。

十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三	十二	十一	十	九
74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64
伊丹發句合刊。淡々下阪。		祇空歿。	俳諧綾錦成る。	支考歿。	方山歿。	雲鼓歿。	七車に序す(鬼貫)	才廣東下。	支考の十論爲辨抄成。	
		落髮。法諱即翁。	名の蒐の序成る(金花翁鬼貫)	獨吟百韻、千歳用眉册成る。七十賀、つく杖のしちにくあゆめもちどり						

俳人鬼貫の研究

文學士 鈴木重雅 著

第一篇 序 論

第一章 鬼貫と其の時代

孟子いふ、居移氣大哉居と。蓋し、千古の鐵案である。其の居る所によつて、移り行く人の心こそ、寔に奇しきものである。金殿玉樓に坐した時と、矮屋陋居に坐した時と、我々の氣分には、天淵の差がある。三間の茅屋、心天廣しなどいふ事は、至れる人の境地である。捨て果てゝ身はなきものと思へども雪の降る日は寒くこそあれといふのが、人情の自然であらう。花咲く日は浮れこそすれといふのが、更に人情の自然であるともいはれよう。衣食亦然り、廣くいへば、環境——その時代の趨勢。その國土の状態が、人に及ぼす影響は、目には見えないが中々大きい。陰惨な北歐の天地に、杜翁の如き思想家生れ、天澄氣朗の南歐の國土より、ダンテの如き文學者出で、礎礎にして天惠乏しき黃河地方よ

り、嚴肅なる儒教興り、熾くが如き炎熱と、極端な階級制度の桎梏に苦める印度より、平等無差別を説く佛教の現れたる、皆環境の然らしむる所に外ならぬのである。國土は、横的に一定不變である。而して、之に對して、縦的に刻々流れつゝあるものは、時代の趨勢である。混々として、晝夜を捨てず、不斷の變化をつゞけてゐる。同じく一國の文學といひ思想といひ、佛教といひ儒教といふも、時代の趨向に絶えず影響せられつゝある。一世の風雲を捲き起せる英雄も、萬古人心を廓清する偉人も、狭くしては一國、廣くしては世界の潮流の外に棹すことは出来ぬ。強ひて離れんとするものは亡ぶ。英雄とか偉人とかは、この潮流に棹すことの、極めて巧なる者に外ならない。天の時に乗じた者に外ならない。國文學亦然り。萬葉時代の人麿、平安朝時代の紫式部、元祿時代の西鶴、近松等皆この例に洩れぬ。國文學の一部をなす俳諧とても同じ事である。故に、その人を見んとするには、先づ、その人の環境、時代を検討しておかねばならぬ。因つて、余は、鬼貫の研究に入るに先だち、彼が活動したる元祿時代について、一顧盼を與へんとするのである。世

の所謂英雄なる者は、天の時に乗じたものであると余はいつたのであるが、假令、信長、家康をして、今日に至らしむとも、恐らくは張三季四の輩に伍して、何等選ぶところは無いであらう。政治、軍事に關することは、天の時に乗せざれば功を收め難く、猶又、地の利、人の和を得なければならぬ。人和を得ることは、殊に大切である。信長家康の影には幾多の隠れたる信長家康があつたに違ひない。一將功成れる裏面には、枯れたる萬骨の力が潜んでゐたのである。故にその功と、之を一人に歸することは出来ぬ。陰に陽にその功を助成したる多くの勢力を除去してしまはねば、赤裸々なるその人の姿を見ることが出来ない。が、それは至つて難かしい事であるので、その人の眞の倂を捉へることは、容易に出来ぬが、文學者は、之に比較して、稍々容易で、その人の著作を読めば、その人の全幅を捧けたる所を看取することが出来る。それは疑もなく、その人の腦裡の所産である。その人の眞の力である。が、それも程度の問題で、その人が、その著作を出す様になつたについて、其の時勢より受けた影響といふことも、考察せねばならぬことは、同一である。

江戸時代は、武家政治發達の極點に達した時代で、舊日本の最後の時代であると共に、新日本建設の準備時代である。政治上より見れば、鎌倉幕府開創以來、朝廷を離れし政權は、武門に移り、南北朝、室町、戰國、織豊二水の時代を経過し、種々の試練を経て、漸次發達しつゝあつた武家政治が完成した時代である。諸侯には、地方の管轄につき、寛大なる自治を許しつゝも、一方では江戸を中心とする、中央集權的封建制度が確立するに至つた。かくて、三百年昇平の基を開き、萬世に傳へんとする慨を示したのであつたが、一方より見れば、この制度がやがて土崩瓦解すべき氣運が、暗々裡に動きつゝあつたのである。それは、即ち京都を中心とする國民精神の活動である。蓋し、建國以來、皇室を中心とする精神が勃興して、江戸を中心とする武家政治の破綻を促し、之に代ふるに、京都を中心とする明治維新を惹起することになつたのであるが、京都中心の思想は、政權京都を離れたる當初より、王權回復の運動として陰に陽に表れ、常に乘すべき罅隙を求めつゝあつたのであるが、織豊時代より、更に鮮明に表れて來るやうになつた。猶、文教を以て

統治の方針とした家康の政策は、國史、古典の討究を促し、國體を闡明することとなり、京都中心の思想は、之が爲めに愈々高潮するに至り、江戸中心の政治は廢れ、府都中心の時代となつた。この政治中心の、東より西へ移動せるに對して、奇なる對照ともいふべきは、文學上の中心の西より東へ即ち京都より江戸へ移つたことである。京都中心の時は、即ち元祿の時代、江戸を中心とするは、文化文政の時代である。元祿の時代は、兵馬恣虐の世を去ること遠からず、幾度か戰場を往來せる古武士、猶存して、豪快自ら喜ぶ戰國的氣風、都鄙に横溢し、武術は重んぜられ、軍學兵法を以て立つ者が輩出し、敵討、辻斬、試斬が盛に行はれ、殉死の習も依然として存し、平民の間にも、町奴男伊達が頻りに出で、南洋の怒濤を蹴つて、鵬程萬里の彼方に通商を試みんとする者も現れたのである。殊に、平民は世が太平になると共に、動もすれば無用の長物とならんとする武士とは反對に、平和となれるが爲めに、頗る經濟上の實力を掌握し、表面に於ては、士農工の下に位したけれども、裏面に於ては、國家經濟の樞機を執つて、新興の意氣當るべからざるものがあつ

た。しかし、彼等は、武士社會の間に於けるが如き、制度上の束縛がない。無學なるが故に、道徳的に掣肘せらるゝことがない。青天白日の下に、揚々として闊歩することが出来た。殊に最上の安全地帯たる遊廓では、思ひ切つた活動を試み、萬金を擲つこと、猶砂礫の如く、四民の目を驚かしたのであつた。

有祿の士より上つ方國郡の主まで殊の外貧困して、凡て商賣を頼みて、内外の事を營む故に、位ある人も商賣を恐れ敬ふこと甚しければ、商賣は是に乗じて、士大夫を輕しめ侮る。

とは、實際を目撃したる太宰春臺の觀察である。階級制度の勵行、政治上の壓迫にもめけず、寸分の隙さへあれば實力を延ばさうとしたので、「公家も裝束なしには、膏藥賣の顔の白いものなり」とは、あながち西鶴のみの、自負ではない、一家言ではなかつたのである。されば、かゝる人々によつて作られたる文化が、豪華の趣、偉麗の風を帶び、潑刺たる意氣を漲らしてゐたことは、當然の事である。元祿模様の絢爛たる、工業作品の豪麗

なる、戲場における市川團十郎の荒事、金平節等、みんな壯快ならざるはない。圓珠菴契沖、荷田東磨の國學における、戸田茂睡、下川邊長流の和歌における、仁齋東涯の漢學における師宣の繪畫における、義太夫の淨瑠璃における、いづれも、進取物、積極的、獨創的、男性的であつて、從來の傳統、因襲、型式の卵殻を破つて、曉天の一聲、高く長夜の惰眠を醒さんとするの概がある。國學、漢學、和歌の如き重厚なる讀書人の間に講ぜらるゝものすら然り。一般平民の文學に於ては、更に清新の氣が横溢して居る。平民の文學には、三つの流があつた。一は叙事詩即ち小説の系統に屬するもの、二は、抒情詩即ち、俳諧連歌發句俳文雜俳、三は戯曲即ち淨瑠璃系統に屬するものこれである。この三流の文學に於て、元祿時代、頭角を見せるは、小説の西鶴、淨瑠璃の近松、俳諧の芭蕉である。美辭麗句を連ねて、しかも生氣なかりし假名草子が、西鶴出づるに及んで、筆路縱横、才藻湧くが如く、頓に俊爽の趣致を帶び來り、舞の本お伽草子と選ふところ無かりし古淨瑠璃は、近松に至つて、統一あり、結構あり、情味豊かなるものとなり、沙翁のそれに拮抗す

べき戯曲を完成した。俳諧は如何といふに、古今集以來の智的傾向の極端に發達せる貞門の俳諧の無味なるを救はんとして、心付けを主唱せる宗因が起つて革新を計つたのであるが、末流に至つて放縱怪誕に陥り、又度すべからざるに至つたので、茲に、更に革新を計らんとするの氣分が、翕然として醗酵したのであつたが、この革新の運動の第一聲を揚げたのは、即ち鬼貫である。彼も亦、この時代の潮流に棹す一人として、俳諧における流行變遷のあるべきことを認め、古來の典型に拘束せられず、各自が獨特の新風を興すべきことを唱へ、俳諧それ自身に、重大なる價值あることを論じて、元祿時代の人らしき新説を立て俳諧の文學的價值を確立したのである。

この點は、俳諧に古人なしといへる芭蕉と軌を一にするものであり、俳諧の幽奥に下駄はきていりこむと自負する許六も、新しきところなくては、俳諧といふべからずといひ、寛厚なる去來すら、俳諧は新しみを以て命とすといひ、いづれも、稜々たる意氣を示してゐるところは、鬼貫に同じいので、此等の俳優をして、假令文化文政の頃に在らしめても

迎もこれ丈けのことはいひ得なかつであらうし、いつた所で實行は出来なかつたと思ふ。鬼貫の新風樹立は、時勢の然らしむる所であるが、併し新風の樹立を計れるは、鬼貫芭蕉のみではない。言水、才麿、來山、素堂、信徳、皆然りである。然らば、この潮流に棹す人とは、全く同じ道をとつて進むかといふに必ずしも左様ではない。大體、同じ方向をとつても、各自、それ／＼異なつた特色をもつてゐる。その千紫萬紅、各々妍を競ふところに興味があるのである。修業の道程に於て、芭蕉、鬼貫は同一であるが、その到達した所に、夫々多少の特色があり、同じ蕉門でも、其角、嵐雪、去來、支考、惟然など、桃紅李白、百花歴亂の觀がある。時代の思潮は、各人に夫々至大の影響を與へるが、それは、各人の個性を透して、様々に現はれて來る。然らば則ち、鬼貫には、果して、如何なる特色ありや。請ふ。余は、先づ、その傳を按じ、次でその俳風に論及しよう。

第二章 鬼貫に關する資料

予は、窃に思ふ。史的現象は、如何に精到なる檢覈を加へてみても、到底、之をあるが儘に再現して、絶對的の眞として示すといふ事は、難かしい。英雄の事蹟など、特に然りである。蓋し、人の和を得ざれば、功を收むるを得ざる政治上の事象は、何處までが果してその人の眞の力であるか、模糊として、容易に捕捉しがたいからである。併し、文學者は、この點割合に、判明し易い。それは、比較的に他の力をかりることが少く、其人の作品に直面して、其の風格に接する事が出来るからである。が、それとても、程度の問題であつて、其の文學者の周圍を環れる人々や、時代の趨勢などを調べてみる必要があるから、左様簡單にも濟されない譯である。其人に關する正確なる資料を、なるべく廣く蒐集し、正確なる事實を基礎として、觀察を試みなければならぬ。

然らざれば、其の研究も、畢竟沙上の樓閣となつてしまふ。鬼貫の研究に於て、最も困

難を感じるのは、資料の佚亡といふ事である。すべて、其の人の著書や作品の一通りを見得たならば、人物なり、經歷なりに不明の箇所はあつても、大體を推定することも出来るのであるが、著作の澤山もない人は、殊に困る。鬼貫などは、左岡俳諧逸士傳に、

スベテ都所ニ編輯ニ數十卷、逐一不可謂也。

とあつて、其の著作は、かなり多かつた様であるのに、今日に傳はる者が甚だ少く、その研究には、多大の困難を覺えるのであるが、开は、畢竟鬼貫の後繼者に然るべき人が無く、鬼貫歿すると共に、伊丹風も衰退に歸したので、散佚してしまつた者と思はれる。門下に逸材の士があつたならば、片言隻語と雖も、傳へらるべきは、芭蕉のそれに比較して、推察に難くない。

書名だけ傳はつて、未だ管見に入らぬものでは、

- 一、俳道慧能錄 二冊 延寶七年刊。
- 二、西瓜 三つ 一冊 延寶九年刊。

………第二章 鬼貫に關する資料………

上島一轉と岡島木兵との三吟といふ。

三、有馬日書(出?) 一札 貞享元年刊。

四、寸の字集 寶永二年刊。

五、佛の兄 元祿十一年刊。

逸士傳に、其中元祿戊寅、製^シ雜百韻^ヲ、題^ス佛兄^ト。或^ハ令^ミ星照^ニ月座^ニ、或^ハ令^ミ松香^ニ花座^ニ。曾^レ不^レ借^ラ鳥獸四季^ヲ。守武宗鑑以來、古今不^レ聞^ニ其作例^ヲ。實^ニ可^レ謂^フ一體祖^ト。實奇^ニ而亦妙也。とあるのを見れば、餘程、趣變つた者であつたに違ひない。鬼貫獨特の俳風を窺ふべき者であるのに、惜しい事である。尤も、序文は、七車に残つて居る。

六、千歳眉壽冊 享保十五年成、安永八年刊。

七十歳の賀に撰したものと云ふ。

七、鬼貫筆記 かういふ題號の書があるかないかは分らぬが、嘯山は見たのであ

らう。嘯山の編纂に係る、俳諧古選卷一に

世の中や蝶々とまれかくもあれ

大阪宗因

連環可誦○此翁興^ニ重頼^ニ交見^ニ鬼貫筆記^ト也唱^ニ談林一派^ニ亦是對機耳。今如^ニ所^レ錄數篇^ニ可^レ觀^ニ其意何如^ト也。

とあるが、鬼貫筆記といふ書がある譯ではあるまいと思ふ。鬼貫の書いた書といふ意味であらう。「鬼貫ノ筆記」とでもよむので、さう見れば、ひとりごとを指して居るといふべきであらうか。

今日猶存する者では、

八、大悟物狂 一冊 元祿三年刊

余は、板本は見た事がない。藤井紫影博士の御所藏に係る寫本を拜見したのである。以前、金澤でお求めになつたものであるとの事で、半紙二十三枚、題簽には鬼貫集とある。七車の卷五に、大悟物狂序 並發句跋 あり百韻の第三以下を略し

であるが、これには、其が全部載せられて居るのが珍しい。その外に採られて居る句は、句選にある句と重複したのが多い。但、作句の年代が往々と記入せられて居て参考になる。本書は、初の部分は、友人鷺動を吊へるもの、後の方の句と鐵卵追悼の連句は、

また鷺動去てよりこのかたいひ捨たる發句もこゝにならべておなじしく誰りぬとあるので、鷺動の歿年なる貞享三年七月よりして元祿三年まで即ち二十六歳より三十歳に至るまで前後五年間の作なることが判明する。句の數は約百。本書の如きは、實に絶えて無くして僅に有る者をいつて宜からう。俳論にも引用してある。先生の御許を得て、附録として反刻することになつたのである。

九、犬 居 士 一冊 元祿三年刊。

元祿三年八月三十日、大阪老松町(?)より、福島に移住した時の日記で、八月三十日、大阪の市を立て、山居をはなれ、里蒙の閑なるを好んで、福島に

心を動し、みつから犬居士と呼で、俳道をほゆ。尾もなくまた頭もなし。

とある。それに有名な有名な禁足の旅記も載せてある。同年九月二十日より十月三日までの江戸行の日記である。固より架空の旅行であるが、酒竹氏の俳諧年表や、俳諧芭蕉談などにも、實際の旅行として居るのは誤である。

十、獨 言 二冊 享保三年刊。

藤井紫影博士の御所藏の板本でみると半紙本である。美濃紙本もあると聞いては居るが未見。鬼貫が年來の俳諧に関する意見を上卷に載せてある、彼の俳論を窺ふべき唯一の好資料である。下卷は、四季の風物を隨筆體にうつしてをる。清新にして雅馴なる筆致は、芭蕉の俳文に比して遜色はない。卷末に、本書は門人千及と市貢とに與へるのであるといふ跋がある。

十一、なゝくるま 二冊 天明三年刊。

鬼貫の句文集で、自身序して曰、抑も十七歳の昔より人に代りて梓にちりぼめた

る俳諧の書あり、獨吟の書あり、としぐいひすてたる發句あり、又序や跋や詞書や、つとまやかにしるし置きて、子孫に永く残さんと心をのするものから、なゝくるまと名づけて、享保十二ひのとの未のとし、さくらをかざす窓のもとに筆を擱きぬ。即ち子孫に永く残さんと心をのするといふ意味で、なゝくるまといつたのである。七車といふは、五車書などいふに同じく、篇什の多い事を意味するであらうか。まだ考へ得ず。鬼貫の門人、高橋只川の裔なる大阪の書肆興文堂は、七車の句の中、鬼貫句選に出た句を除き、俳諧七車として天明三年出版した。鬼貫に私淑したる太祇は、鬼貫冊句選を撰したのであるが、七車を見ずして句を採集したのであるから洩れたのも多い。七車の覆刻本は下巻の四十二四十三丁が落丁になつてゐるとの事である。勝峰晋風氏の所藏のは、題簽が鬼貫發句集となつてをり、それには落丁がないとの事であるが、予はまだ見た事はない。この七車があるので、辛うじて、鬼貫の文藻を見うる譯であるが、本書收むる所の

文は、序跋、贈辭、記讃、哀傷、何れも面白く、婉雅にして清遠、歌道に造詣深かりし彼の作として、成程と頷かれる。七車に附載した嘯山の鬼貫傳は、諸書に引用せられて居り参考にはなるが、絶対に信じうる程の者ではない。これについては、再び述べることにする。

句選に取られた句は、今日ある七車の中の句に比較すれば、遙に佳作が多い。七車の句には殊に難解の句が多いが、鬼貫の傳記を考へるに参考になる句が少からずある。

十一、鬼貫獨吟百韻 一冊 安永八年刊

伊丹の坂上蜂房の句集と併せて出版したものだといふ。未見。

十二、俳諧聯句百韻 一冊 享保十五年刊。

酒竹氏の鬼貫全集に收載せられてをる。

鬼貫の撰に係る者ではないが、鬼貫の句や文の載つてゐるのでは、七車に出てゐる

る外に、

十三、鉢 扣 一冊 正徳二年刊。

伊丹の俳人蟻道が正徳元年五月十三日歿し、その子花天及び億麿が、翌年一周忌を營めるに際し、句と文とを贈つたのであるが、それが録せられて居る。(古俳書文庫第十六篇)

十四、俳諧たつか弓 一冊 享保十五年刊。

來山の十三回忌追善集であつて、五流齋布門の撰。鬼貫が跋を書いて居る。

十五、俳諧葉久母里 二冊 享保十八年刊。

同じく十七回忌追善集。布門編。鬼貫の句が見える。

十六、江 鮭 子 一冊 元祿三年刊。

之道の編。之道は大阪の人で鬼貫の友人。蕉門の俳人

十七、けんごろ、山三葉

この二書は、いづれも未見。

十八、伊丹發句合 一冊 正徳四年刊。

鬼貫の跋がある。

十九、俳 諧 團 袋 一冊

北條團水の編。その中に一言芳談といふ條があつて、鬼貫の語が見える。

二十、狂歌種ふくべ 一冊

鬼貫の大阪時代の友人永井走帆の七回忌追善の爲めに、水谷李郷の編纂したものである。余は藤井紫影博士の御藏架に係る板本を拜借して頂いたのであるが、其は半紙三十六枚一冊本で、浪華書林和泉屋卯兵衛校とある。鬼貫の序、鬼貫の追悼の狂歌一首がある(後出)

次に鬼貫と同時代の人の書いた鬼貫の傳記類、伊丹派の關係書類を挙げると、

二十一、在岡俳諧逸士傳 三卷 享保八年刊。

……第二章 鬼貫に関する資料……

鬼貫と同郷の友人、森本百丸の撰に係る。百丸は、ヒヤクマルと訓む。名は宗賢といひ、白鷗堂とも號し、重頼の門人であるが、資性磊落にして、鉅萬の家産を蕩盡してしまつたといふ人物である。この人の傳記は明かでないが、椎本才磨の序文によつて、辛うじてこれ丈に分る。なほ七車によれば、

百丸因幡堂のほとりに閑居をうつす、むかふに人家もなく、常盤木目を覆うてみどりなり

秋は先づ此宿ゆふべ朝ほらけ

の句があるから、そこにゐたことが分るが逸士傳の耳廣の條に、百丸は自らいつてをるが、彼は若い時は京都にをり後伊丹に退隱し、本年(京保七年)伊丹の花岳山光明寺で耳廣にあつたといふことをのべてゐるのによれば、伊丹でかいたのに相違ない。本書は、伊丹派の俳人七十七人の傳記を漢文で書いてある。雅馴にして平明、學殖の程も察せられる。余は板本は見た事がない。伊丹で數種見たが、

皆美濃判の寫本で、字體は、何れも同じかつた。百丸の書風を模したものでないかと思ふ。中には、百丸の跋のついたものもあり、それには猶百丸(?)の肖像がつけてあつた。跋によると本書は、蟻道の弟なる長父に贈るとある。普通の刊本によれば、享保八年に刊行した事になつてゐるが、百丸のこの跋は、「逸士傳一部三卷は在岡むかし今の好士七十四人(〇七十餘人の誤か。七十七人の傳記を輯録してあるのだから)をあつめて其傳を愚なる筆してしるしつけ長父におくるまこと」に老のかたみならむかし

享保十一年丙午九月吉旦

七十二歳百丸

とあつて、十一年につけたものだといふ事が分る。享保十一年が七十二歳とすると、逆推すれば承應三年の生れで鬼貫より七歳の年長である。兎に角、稀觀の珍籍といはねばならぬ。著者が、著者と同郷の俳人の傳記をものしたのであるから、正確憑るべきものなる事いふまでもない。俳人の姻戚關係なども明瞭に分り

此等の濟々たる俳人が、桃紅李白、各々妍を競うて、伊丹の俳風を對揚するに至れる所以も、頷かれるのである。鬼貫の傳記は、中卷に見える。簡單ではあるけれども、正確である。蓋し、本書の成れる享保八年には、鬼貫はまだ生存してゐて、六十三歳の時に當る。殊に、かの「佛の兄」などは、散佚して吾等の見得ざるものであるが、本書にその特色を記してあるので、其の大體を想見することが出来る。唯、望蜀の感をいつてみるならば、漢文で書かれて居る爲、自ら簡疎に流れた憾がある。和文ならばもつと精密にかけたらうと思はれるのである。最近余が、此に註釋を加へ、尙前記の「鉢扣」をも併せ、古俳書文庫の第十六篇として、天青堂より出版した。意があつたら参照して頂きたい。

二十二、伊丹生俳諧 一冊 元祿五年刊。

鬼貫の作は載つてゐないが、伊丹の俳人、青人、百丸、蟻道、鶯助、三紀の獨吟及び發句を録したもの。井筒屋より出版。大野酒竹氏の鬼貫全集にある。

二十三、伊丹發句合 一冊 (重出)

鬼貫の友人なる月尋が、自らの句と他の伊丹俳人の句とを番へて、判を椎本才麿に乞うたものである。鬼貫も、跋をかいてをることは、前にのべた。卷末に、伊丹俳人の百韻即興、及び發句を附載してある。兩書とも伊丹の俳風を窺ふには、参考になる。酒竹氏の全集に收めてある。

二十四、正續今宮草 二冊 天明三年刊。

今宮草は、いふまでもなく、小西來山の句文集である。來山は今宮の十萬堂に隱栖して居た、鬼貫の無二の俳友で、膠漆の懇情は、その贈答の句に溢れて居る。今宮草には、鬼貫に直接關係ある句や文はないが、續今宮草の方には、數章ある。殊に、「寺島の記」は、鬼貫の生活の状態を窺ふに、最も有力な資料といはなければならぬ。

二十五、俳諧花見草 四卷 元祿十五年刊。

著者轍士は、風翁とも號し、宗因の門人で、その歿後は西鶴に従つた。京都の四條高倉上る町に住し、元祿七年江戸に下つて、其嵐二子の提撕を蒙つたが、元祿十五年再び入洛、諸國の俳人を遊女に見たて、この書を撰し、匿名で上梓し、好評を博したが、その爲隨分、人にも恨まれたりした。鬼貫の友人でもあるのであるが、鬼貫の評も、簡單ながら記されてをる。多少の参考にはなると思ふ。轍士は、鬼貫の友人で、七車の、「明やすの此ほのふや烏帽子顔」の句の詞書に「五月十四日金毛が家に日を待例有て言水轍士之白百丸各うちがたらひてゆきける……」などとある。

以上は、何れも鬼貫時代に出來た俳書で、鬼貫に關係あるものを擧げたのであるが、次に鬼貫の歿後に成れる文献を見ると、

二十六、鬼貫五十年懷舊 天明七年八月二日

此は大阪府下池田なる稻東猛氏の所藏に係る印刷物であるが、予は、それを勝

峰晋風氏が寫されてをるのを、拜見したのである。此は、別に題といふ者がある譯でないが、このすりもの、中央にすつてある題號をとつて假に名づけたにすぎない。五十年忌を營んだ机月といふ人は、どんな人であるか、よく分らないが、鬼貫の支流たることは、間違ないであらう。五十回忌に句を贈つてゐる竹外、田福は池田の人。月溪、几童等と同じく、みな蕪村の門流であらう。この文献は、鬼貫の歿後五十年を隔てたる天明時代に成れる者なるが故に、絶對の信を措くことは出來かねるれども、何しろ資料の乏しい鬼貫のことであるから、寔に貴重な者とせなければならぬ。殊に、鬼貫の支流である人のかいたものであるから、萬更の他人がかいたものよりは、更に正確だと思ふ。そして、九州の柳川侯に仕へたなどいふことは、外の資料には見えない事蹟である。が、この文書の確實性を弱くする點も茲にあるので、即ち見方によつては、鬼貫の子孫なるが故に、父祖の聲譽を高からしめんが爲めに、誇張してかいたと思はるゝ所はないで

もないといふ事である。柳川侯に仕へて、祿三百石を賜ふとか、同祿で郡山侯に仕へたなどいふのは、それである。柳川郡山はみな小藩であるが、三百石といふ厚祿を以て、一町人にすぎない鬼貫を迎へるといふ事があり得るだらうか。もし果して然りとせば、何のわざを以て仕へたのであらうか。疑はざるを得ないのである(後出)。然し、今、之を否定すべき材料が別になく以上は、虚構と斷ずることも出来ぬから、一異聞として、参考に止める外ない。

二十七、七 車 跋 三宅嘯山 天明三年秋八月上浣

大阪の書肆高橋氏、七車を梓行するに當り、その友人たる蘆屋を介して、嘯山に跋を求む。嘯山は、鬼鬼が、其人歿して名稱せられざるを嘆き、之が爲めに、鬼貫の略傳を併せ記して跋を作り「千載知己の意を濟す」といつてをる。嘯山は、鬼貫の研究史上重要な人である。果然、從來多く出た文學史や、俳諧史などは、皆大抵この跋を祖述する者が多く、鬼貫の傳記もまづは、この跋以外に出ないとい

つた有様である。が、嘯山の記述は、悉く金科玉條として信じ得るだらうか。まづ記述の精粗といふ點で比較してみると、前掲の五十年懷舊に見える柳川在住の事、七車に見える大野城主に仕へた事など、鬼貫の傳記としては、可成重要な事であるに係らず、傳へて居らぬ。又芭蕉を罵倒したといふこともいつてあるが、これとてもたしかな根據あつての事か否かが明かでない。この記事を信じ、この記事を重く見る結果、鬼貫の句に、芭蕉を揶揄するの意を寓して居るといつて、句の解釋上にまで、重大な影響を及ぼすやうな事も起る。「同人」誌上に試みられてゐた「鬼貫」研究の輪講の如き、その一例である。尙それは、後に述べるであらう。

二十八、其 他

鬼貫に關して參考すべき者としては、まづ右の如き文献があるが、その外には、寶曆元年建部涼俗の蕉門頭陀物語、天明五年關更の俳諧世説、文化十三年夏目成美の隨齋俳話、享保二年芭蕉談(文曉)享和三年の瀧澤馬琴の著作堂一夕話、天保……第二章 鬼貫に關する資料……

九年、生川春明の俳家大系圖、文化十三年竹窓玄々の俳家奇人談、享保二年の大伴大江丸の俳諧袋、嘉永二年の綠亭川柳の俳人百家撰などがある。

この外にもあるが、重なるだけあけるとまづこんなものである。

明治に入つてからは、明治三十年に大野洒竹氏の編に成れる俳諧文庫第二編芭蕉以前俳諧集(博文館)の中、俳諧略史に於て、伊丹の俳風を論じ、鬼貫に及んでをられる。これが嚆矢である。同三十一年春陽堂から同氏の撰に係る鬼貫全集が出版せられた。翌年更に同氏の校訂で、俳諧文庫十四篇素堂鬼貫全集が出た。研究したものとしては、俳諧史や文學史などに少しづつ記載せられて居る外には、まとまつたものはまづないといつて宜い。資料が乏しいので誰も手を染めた人はない。近時、俳誌「同人」に於て、鬼貫句選の輪講を試みられてをる。又、ずつと以前の小説に、北垣四海氏の俳人鬼貫といふ文が出てゐるらしいが未見。

附記。本書出版の間際になつて見たもの二三種を追加する。何れも川西和露氏の御好意

によつて、其の御秘藏の一部を見せて頂いたのである。

俳諧生駒堂。燈外の編したもの。來山の序跋がある。十萬堂未來居士と署してあるのが珍しい。來山には、未來居士といふ號があつたと見える。元祿三年の刊行。この中に鬼貫の連俳もあり、發句もある。一寸目についたのでは、

おとなしき時雨をきくや高野山

愛宕火に稻妻光るどひやうし哉

銀もてばとかく賢しすまの月

人の親のくるとばかりや魂祭

くものすは暑きものなり夏木立

此夏は幾度きかむほとゝぎす

名の菟。岡山の雲鹿の撰に係る。鬼貫との對吟もあり、序は鬼貫で、それは享保十七年であるから、晩年の作である。序に曰、

吉備の岡山靜なるまゝのきに角を見せていつとなく雲鹿と呼ぶ好人あり。若かりし比、拾穂翁洛にありし時は荒増を覺えてさのみ紅塵の交りをよろこばず今はむかしひれたるもかたくなしと享保壬子田簀に笠も着ず杖もつかず只俳諧の片冊に翔る其心ざし鶴に化してあまねく世の人の眉の上に沖れと戯れて

金花翁鬼貫點す

花橋 正徳三年羨鳥の選したるもの。

花待やその三千とせの冬の桃

羨 鳥

筆に硯に春近き宿

鬼 貫

島の名に人の言葉の寄も來て

同

印南野 千山の選に係る。元祿九年刊。

これにも少ゝ入つてゐる。

第二編 本 論

第一章 鬼 貫 傳

一、系 傳

東攝の平蕪、茫々として遠く開け、東に葛城の秀峰を仰ぎ、西に淡路の島影を望むの地、そこに古き伊丹の邑がある。有明岡の麓、猪名川の澗、山は青く、水は白く、江山秀麗の鑑る處、それは元祿、俳壇の雄帥、上島鬼貫を出した所である。抑も伊丹の地たる、既に永享の古より、造酒を以て、其の名高く、慶長年間より愈々隆盛に赴き、「劍菱」の芳醇は夙に天下に鳴り、所謂灘五郷の美祿も、随つて出るやうになつたのである。殊に、近衛家が寛文以來、伊丹を領有することゝなつてより、其の庇護を得て、伊丹の造酒業は、益々興り、後の事ではあるが、頼山陽の長古堂の記にもいへるが如く、歳以三十餘斛爲率といふ

位になつた。近衛家は、伊丹の知行高二千石を領して、中々格式があつたものであるといふ。元祿の頃は。酒造の最も盛な時代で、戸數も千に餘り、その中造酒を業とする者、八十八戸を數へるに至つた。御用酒として、毎歲禁裏及び近衛家に進献し、また幕府へも献上する例で、幕府へ献上濟にならねば、江戸へ送つた酒が、既に到着してゐても、賣りだす事は出来なかつた。始めは、馬で送つた者であるが、後には、神崎の濱から舟に積んで江戸へ廻漕したのである。重頼の句に

伊丹こそ酒の元船江戸廻し

とあるのは、それである。近衛家よりは、伊丹御用酒改といふ烙印を賜はり、菰包の樽に押し、江戸大阪に賣つた。秋、新穀をとり、冬之を醸し、春、之を搾るのであるが、猪名川の流に俗を洗ふので、川水も太白に染まつて、芳醇芬芬、貧窮の輩は、その洗ひ汁を飲んで酔うたとさへ、傳へられてゐるので、鬼貫の

伊丹 俗 洗

賤の女や俗洗の米の汁

は、その光景をいふのである。鬼貫の家も、近衛家の御領の造酒家であつて、随分豪富を誇つたものであるらしい。伊丹の代官所は、上島八郎兵衛、小西新右衛門外六人の町人が預つて近衛家監督の下に一切の事件を裁決することになつて居り、そして、毎歲その事務の監察の爲に、人を伊丹へ遣はす例であつた。鬼貫の家が豪家であつて、彼が近衛家へ出入りした事から推せば、上島八郎右衛門といふのが、鬼貫の家であるやうにも思はれる。上島家の酒の銘は、三文字であるし、墨染寺の鬼貫の墓の近くにある石碑も三文字である。しかし、伊丹には、上島氏といふ姓が随分多いやうであるから、一概にはいへない。俳諧袋下に

一、鬼貫、攝州伊丹油家、平泉氏、重門云々

とあるから、屋號は油家といつたと見える。又隨齋諧話に、大江丸が物語つたこととして述べて曰、

伊丹の鬼貫は肝のふとき者なりしとぞ。通稱三郎兵衛といひて、近衛殿の御領の造酒家なりし。かねて近衛殿へも御立入申せしに、或時御殿に御會ありて、何の宮くれの殿上人などあまたつどひ給ふ。折ふし御勝手に三郎兵衛参れるよしを申に、それは鬼貫といひて、はいかい體の句つくれるものぞ。めし出て句申させよなど、まろうどたち申給ふに、やがて御席に参りて平伏す。云々

とあるので、その昔は豪家で、近衛家へも度々出入してゐた事が分る。又七車の、鬼貫がかいた序に

十三歳の頃松江の翁をまねきて流を汲んといふより明暮心を盡しぬ

とあつて、重頼を招聘する程であるから、相當な家であつたらうと思はれる。鬼貫は、その家系を尋ねて見ると、加樂井氏の支族であつて、其の先は、陸奥の和泉三郎忠國より出てをるといふ。(七車跋、五十年懷舊)。姓は上島氏で、在岡逸士傳に、權花翁鬼貫、姓上島氏とある。名は治房、通稱は與三兵衛、(七車跋、懷舊)或は三郎兵衛(はいかい袋、隨齋諧

話)又は、惣兵衛(俳家大系圖、俳家奇人談)ともいひ、又惣右衛門とも傳へてをる。後に利左衛門と改めた。權花翁(權は金に書いてゐる所もある)、馬樂堂、囉々哩(哩は理にも作る)犬居士、佛兄の諸號がある。權花翁、犬居士の外は、分り難い號である。犬居士は元祿三年の犬居士に、

みづから犬居士と呼で、俳道をほゆ。尾もなくまた頭もなし。

佛元は、元祿十一年の佛の兄の序に

元祿よつのとし、鬼貫の名を馬樂堂にかはり、ことしまた佛兄になつて、俳諧の自序していふ、そもそも此の書の名となせし心は、古歌によめる佛の兄にはあらず、是なんのあにぞや。云々

古歌によめる佛の足とは、どんな歌をいふのであるか詳でない。俳家大系圖に、

或人の云、鬼貫の二字を高貴の御方きこしめされて、句はいと風流びたるに、などてかく恐ろしき名やつけると、笑ませ給ひぬと聞きて、佛兄と改めたりといへり

との説をのせて居る。前者によるべきであらうが、佛の兄の序だけでは、よく分らない。この鬼貫といふ意味も、明かではないが、句選の序に、太祇が

道にたどりふかき翁ありけり。そのゆくや、たかきより飛び、ひくきより躍いづ。峻きに立、ほそきをつたふ、ざれありき、おもむろにありく、夢のうき橋足さはらず、ふむにこゝろよしとなん、世ばなれければにや、おにつらといふ。むへ鬼なるかな。

と解して居る。鬼貫の所謂「道ひろき俳諧、みちせまき俳諧、千筋あり一筋あり」といふ様な俳諧に「普く鬼貫の鬼たる無凝自在」なる働きをするといふ意味にとつて居るやうである。鬼といふのはそれで宜いとしても、貫といふのが、おちつきかねる。或は、鬼貫は鬼面ではないかとも思ふ。さうとすれば、大系圖の逸話も、解せられるやうであるが、何ともいへぬ。或は思ふ。伊丹には劍菱と相並んで「鬼ころし」といふ名酒があつたさうである。それと何かの關係がありはせぬだらうか。鬼貫は「寛文元年辛丑春の末、攝州河邊郡有明の岡猪名野のほとり糸海に生る」(七車序)といつて居る。上島家が、如何な譯で、家

運衰頹、本領を退轉するに至つたかといふ事は、これといふ資料もないから分らないが、逸士傳の選者にして彼の友人たる森本百丸も、「性磊落不産業家。家資巨萬爲鳥有。如叟者眞可謂風塵表物。」と椎本才麿が、逸士傳に序して居るやうに、磊落の氣象、遂に鉦萬の資財を蕩盡して了つたのであるが、鬼貫も矢張り左様であつたのではなからうかと想ふ。これは、鬼貫の人物から考へても、あり得べき事であるが、それはまた後で述べよう。彼が、故郷を去れるは、果して何時であつたかといふ事も明瞭でないが、大悟物狂に、
如月の始伊丹を起はなれて

曙や麥の葉末の春の霜

とある。而して本書は、「また鸞動去てよりこのかたいひ捨たる發句もこゝにならべておなじく語りぬ」とあつて、鸞動の歿年即ち貞享三年よりして、本書刊行の元祿三年五月までの句集であるから、伊丹を起はなれたるは、遅くとも、元祿三年即ち鬼貫の三十歳以前でなくてはならぬ。が、貞享三年六月東武に赴いて、秋七月歸于難波と大悟物狂に出てゐる

から、貞享三年には、既に難波に出て居たらしく察せられるから、この句も貞享三年の二月頃であるかも知れぬ。郷里を出た後も、時々故郷にも歸つた事はあるらしい。

猪名野の古郷に春をむかへて

事はじめいくやるなのゝしらうつぼ

在郷

種なすび軒に見えつる夕かな

故郷を離れては故郷なつかしく、箱根山にて故郷を思ひ

ふるさとをまねくか尾花二子山

又京都に流寓の頃は、

伊丹より年々東武に通ひける人ことし花のつぼめる頃我れを尋ねて京に來りけるほどに久しく過ぎし昔をもちたりなんと引きとどめて

武士の數こそなけれ花ぐるま

旅宿の寢覺に古郷を思ひて

夜あらしや時雨の底の旅まくら

故郷を去つてまづおちついた所は大阪らしいが、逸士傳の其冠の條に

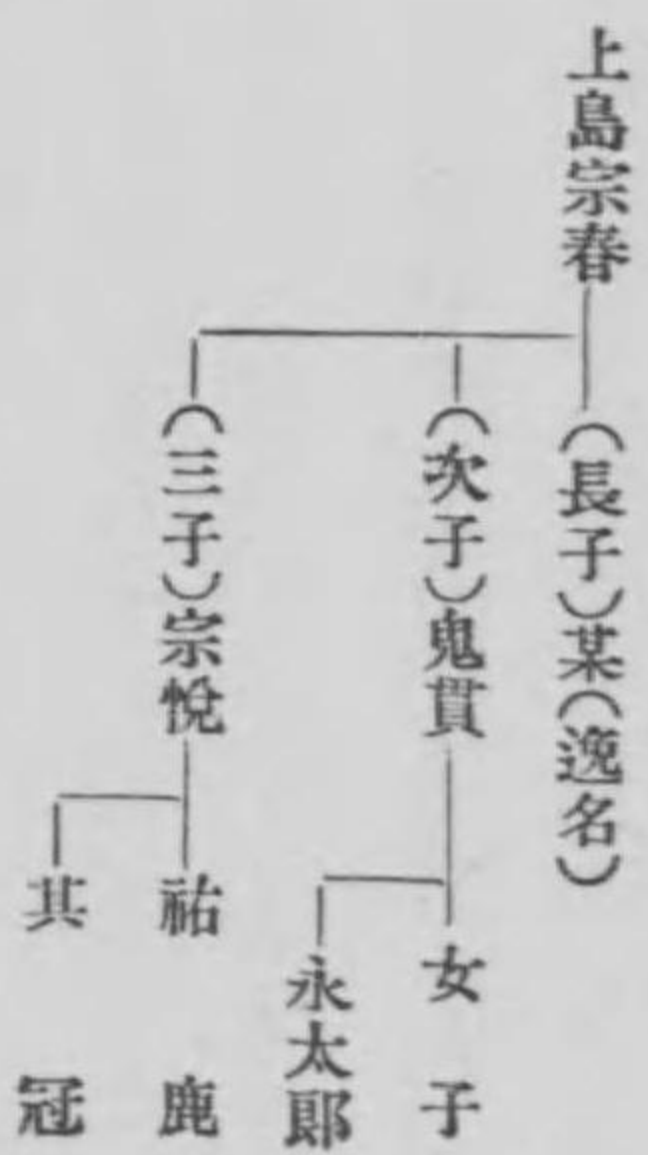
其冠者上島氏宗悦之子、祐鹿之弟、鬼貫之姪也。少而讀書善草隸。性不羈而嗜俳諧。乃學鬼貫之風體。嘗題春前花、著一集。壯歲辭在岡、南入坂城。常友筆硯、閑樂丹青。如冠者、豈是塵俗之者耶。

とあるやうに、一族皆大阪に行つた様である。

鬼貫の父は、宗春といふ。其は逸士傳に

權花翁鬼貫、姓上島氏。宗春之仲子。

とあり、而して、鬼貫を仲子といつて居る所を見ると、鬼貫は三人兄弟であつたに違ひない。長子は、其名逸して傳はつて居らぬ。次男は即ち鬼貫。末子は、其冠の條の記事から察して宗悦だといふ事が分る。之によつて家系を按ずれば、次の如くなるであらう。



父宗春については、何等傳ふる所はない。唯、句選に、

父のみまかりける忌中の名月

虫も鳴月も更たり忌の中

の句がある丈けである。その外には、七車に

題 黄 昏

床まくら父に骨折るあふぎ哉

この父は、果して宗春をさしたのかどうか明かでない。思ふに、母よりはずつと早く世を

去つたものであらう。母に關係ある句は、七車に、

彌生朔日老母と大久保道古をいざなひて高臺寺へ行けるに道古發句所望

松杉ににはひがあるかころもころ

高臺寺は、京都の東山の高臺寺であるから、鬼貫が京都に在住中の事である。鬼貫が京都にゐたことについて、最も早く文献に見えるのは、元祿五年である。少くとも、この頃即ち彼が三十三歳頃までは、存生の事と思はれる。この老母に仕へて孝養を盡したらしい事は、この句の外に

老母をいざなひて

風もなき秋の彼岸の綿帽子

などの句もあつて、暑からず寒からずの彼岸の頃や、春風都大路を吹く日和には、老母に伴うて、佛參などしたものと見える。老母は、綿帽子を戴いて居つたのであらう。句選に
何思ふ八十八の親もつて

の句があるが、親とのみあつて父か母かいづれとも判然せぬが、恐らくは、この老母をさすのであらう。元祿三年の禁足旅記に、「吾妻のかたに旅したけれど用なきに身を遠く遊ぶこと、暫く老親の爲におもければ云々」とあるが、これも父か母か、それとも又父母を共に指していふか、明かでないが、先づ母と見てよいかと思ふ。さうすると、兎に角、元祿五年頃までは、少くとも、存生の事と思はれる。歿年は分らぬ。

老母のみまかりける夜

けふの秋にいつあふことぞ親にまで

いんじ中の秋老母にはなれける魂祭りに

去年ににたけふならばこそ鯖くはめ

女に就いては、何の手がよりもないが、

中秋十七日女のみまかりけるを

ゆく水にうき世の月もきのふかな

の句が、僅にそれと思はれる丈けである。恐らくは、彼の長女で、頭陀物語に、

難波の堀江に咽渴かし、短かきあしの葉蔭にふしては、床に蓬はたのしめども、一女のやしなひ心の外に、今は鬼貫の名を隠し、朝夕の煙りをいとふ。昔は花洛に遊吟して、翁と畫讃の遊をもなせしが、其人は、東西に錫をならし、吾はよしあしに身をひそめ、釜中の魚の水をしたゝめ、みなしろなして、長物なければ、ともしびの陰に通をしたゝめ、一貴一賤交を見るといふ、それもまづしきひがみといはん。きのふ門前に車馬をつなぎ、けふは雀の巢にあらされ、餌にあたふべき一粒もなく、今日にせまり候間、自殺に及び候。なき跡人をさはがせじと、この一條を残し候。御存じの娘ひとり、鼻に木の實のきずもあらず。情ある人すくひとりて、若菜にあさらひの水を汲ませ雪には、堀江の枯芦を折らせて、薪水手のまゝに御遣ひ給はれかし。蓬生のひめおとしめ給ふなど、書とどめて稱名す。娘おどろき双にすがり、やよまち給へ、われ死なん。いとけなくして母を見ず。父のふところに人となれり。われ聞く。双は仇あり

しとき、うらみを切る。この故にこそ國をおさめ身を守る日の本の寶とや。未だ聞かず、貧にせまり子をたすけて、尊き父をころすものは、よしなやな、われあればこそ父のほだしいくほどぞ。又双に身をさくとも、父の貧父の愁かさぬるの罪となる。びたすら川竹の流に沈み、代をとりて孝にかへんと、よとなきて聲を惜まず、時にあれたる戸をたき、頭陀重く杖を曳きて、久しく面せざる路通來る。親子あはて面をかへ、双を箱に納めながら、娘はかたへにまぎれ入りぬ。鬼貫この事つゝむに忍びず、しかぐの事を語れば、路通も雨の如く涙を落し、人の行衛のはかなきを歎じ、鼻うちかみていへりけるは、死すべからず、賣るべからず。父をすくひ、子をすくふ我にひとつの術ありと、鬼貫が耳に口をあはす。其後鬼貫も幸を得て、賑々しく世を渡る。されども知れる者はうき名をうたひ、路通は似筆の上手といはれて、社中の憤を受けしとぞ。

とある。本書は寶曆元年即ち鬼貫の歿後十三年に出來たものであるが、こんな小説的事實

が果してあつたか否かは、疑はしい。著作堂一夕話には、頭陀物語を引用して繪までいれてある。その挿畫の餘白に「胸中自有千金咏囊裡應無一貫錢」との贊をしてをる。更に歿後四十五年に成れる俳諧世説には、

路通鬼貫が貧にせまるを見て、是を憐み、鬼貫にさゝやきて、あらぬ邪なる事せしとかける書あり。大なる偽なり。鬼貫は蕉風にあらずといへども、其頃伊丹の鬼貫と人の稱し、もてはやしたる賢固の隱者なり。既に貧にせまりし時、二女を高家のおもひのにと媒する人ありしに、鬼貫かたく義を守りて、是をゆるさず、かくまで風流の人たとひ水火の中へ陥るとも、豈によこしまなることにくみせんや。まして路通もさる者なり。何とて風流の人に對してあらぬ巧みを語らん。かゝる事しるしたる人の其志の野鄙なることを察すべし。古書に曰く、詩は志をいふと、俳諧に於ても又恥ざらんや。

更に歿後七十八年に成れる俳家奇人談には、

上島惣兵衛は攝州伊丹の人、針料を以て浪花に遊ぶ。家貧うして資用に乏し。或人その一女を權貴の妾に賣らんことをすゝむ。義を守りて之を固辭す。其の性の嚴正なる大率斯の如し。然るを或書に、蕉門路通と惡事をさゝやき、又ともに亡師の法會を妨ぐなどいへるは、大なる妄談なり。云々

これも、大同小異の話である。が、何れにしても、頭陀物語が、虚構の事を傳ふるに至つた本である。「堀江の枯芦折らせて」とか「難波の堀江に咽喝かし」云々といつてゐる所を見ると、鬼貫の難波堀江に住んでゐた時の事、即ち福島汐津橋のほとりに假寓して、「むかふは堂島の新地の家立ちならび舟きほふ。堀江の川嵐に、西海の浪を忘れ」(犬居士)たる元祿三年の頃の事となつて來るが、犬居士によると、この年九月五日、小西來山が鬼貫を訪うて、

秋風や男世帯に鳴く千鳥

の句を吟じて居る。この句は、續今宮草の下にも、

鬼貫が福島に住ける比

秋風や男所帯に鳴ちどり

と出て居る。男世帯といつて居る所から察すれば、女手はなかつたに違ひない。もし、その娘でも居たとすると、男世帯といはなかつた筈である。尙、男世帯であつた證據として有力なるは、鬼貫の友人、大阪の舍羅の門人に蟹口といふ人があつた、西の宮の人であるが、その著「消息をりく」中にのべて曰、

江州路通、毛吹、阪地にまかりて、如月の中ごろ、大和におもむく。師舍羅鬼貫風流の吟をもよほす。路通、毛吹、ふくしまの宿におきふす。

とある。路通や毛吹が同居してゐたのである。のみならず、この女を賣るといふのは、貧に迫つての事であるが、福島に移つた時の模様を、鬼貫自身のかいた犬居士の文面で見ると、それ程の困窮とも思へぬかきぶりである。

明れば、長月朔日、家せばくておほからぬ道具さへ、おき所なく、そこそこに棚など

つら。せて、晝のころまでは陋し。やうくほこりはき捨て安座す。

吹風や稻の香にほふ具足櫃。

人に棚をつらせたり、具足櫃を飾つたりしてゐた位なのである。してみると、頭陀物語の記事は、愈々怪しくなつて來るのである。まして、この元祿三年は、鬼貫が三十歳の時でこんな娘をもつには、いかに早婚の時代であつたにしても早すぎると思ふ。兎に角、男世帯であつたのだから、たとへ娘をうるといふやうなことが、いつかあつたにしても、少くともこの元祿三年の時ではない。この頃は、老母も存生であつたのであるが、(禁足旅記) 男世帯とあるから、一所には居なかつたのである。妻は如何といふに、一體妻については、全然記載したものが無いが、早世したのではないかと思ふ。尤も、元祿八年に二男の永太郎が出生したのであるから、同年迄に存生の事は疑をいれぬけれども、この福島在住の頃に、男世帯であつたことから、考へると長女をうんだ妻はこの時已に早世してゐたではなからうか。その點は、この頭陀物語の説はあたつてゐるのかも知れぬ。さうすれば、

永太郎の母は、後妻といふ事になる。この元祿三年より後、永太郎をうんだ八年までの間に娶つたことゝなる。「いとけなくして母を見ず」との娘の詞が却つて眞を得てをるかとも思ふが、しかし斷言は出來ない。

二男永太郎は、元祿八年正月六日の夜、母の夢想に、南面に松はえにけりといふ句を得て、其の年の亥の月の中の亥の日、卯の上刻に生れたが、元祿十三年正月五日より痲瘡を病んで、十五日戌の下刻に死んだ。行年六歳。法號利陽童子。伊丹墨染寺に葬る。今猶その墓は残つて居る。一七日に、鬼貫の手向けた句は

土に埋て子の咲く花もある事よ

詳しくは、七車の「亡子を悼し詞」に出て居る。

利陽童子に別れし年八月十五日夜

此秋は膝に子のない月見かな

愚痴々々とひとりに更る月見かは

元祿十四年正月十五日亡子が一回忌に

去年より物一時も忘れぬ

元祿十三年といへば、京都在住の中と思はれるが、墨染寺に今残つて居る墓も、子供としては、立派な墓で、左程窮迫してゐたとも見えぬ。さてこの外に、もう子はなかつたかといふに、七車の序に、

又序や跋や詞書やつまやかにしるしおきて子孫に永く残さんとの心をするものからなくくるまとなづけて享保十二ひのとの未のとしさくらをかさす窓のもとに筆を擱
きぬ

とある。享保十二年は、彼が六十七歳の時で、永太郎を失つた元祿十三年から、二十七年を經過して居る。永太郎の歿後に、子供も生れたのであらう。鬼貫の歿後、子孫はどうなつてゐたかといふ事は、五十年懷舊に、「其子孫同州池尻村に住し今猶存す」といつて居るから、家系は、ずっと天明まで續いてゐたのである。

さて、鬼貫は、この伊丹に生れ、伊丹で人となつたのであるが、幼年時代の事は、詳しくは、分らないけれども、八歳にして已に、いないける句を吐きてより、より／＼句をいふこと數あり。才氣煥發、夙にその機鋒を現はし、天成の寧馨兒たることを示して居つたものゝ如くである。伊丹に關する咏吟も少くない。伊丹町の東方に連れる一帯の丘陵を、有明岡といひ、又は略して在岡といふ。織豊時代には、荒木村重の居城があつた。天正七年、叛を謀つて、遂に信長の爲に、亡されたのである。今、伊丹驛の附近の丘が、その城跡である。その落城の古を思つては

有岡のむかしをあはれにおぼえて

古城や茨ぐろなるきり／＼す

の吟があつた。茨わびしき野徑の畔、そこは百年の昔、幾多の纏緜が消えを争つた所で、上下を俯仰して、感懷に堪へないといふのである。

鳥はまだ口もほどけずはつざくら

猪名野神社に立つてゐる句碑に刻してある。

伊丹愛宕火

愛宕火に稻妻光るどひやうし哉

此は、毎年七月二十四日、池田五月山の愛宕の祭に、提燈や燈籠をとすのを、愛宕火といふ。どひやうしは、ただどひやうしに長き脇差などの、どひやうしである。稻妻光るで切れるのである。愛宕火については、宗因に天も酔りけにや伊丹の大燈籠の句がある。

愛宕火やむれつゝ暮を花ざかり

月なくて晝はかすむや昆陽の池

門松やうしろにわらふ武庫の山

も、伊丹在住の頃のものであらうか。

二、伊丹を去る

伊丹に於て、豪富を誇れる上島家が、何故没落するに至つたか、何故伊丹を去らざるを得ざるに至つたかは、鬼貫自ら何等洩らして居る所はないのであるから、全く疑問である。唯、假説として、前に述べたやうな事情があつたのではないかと、いふまでである。遅くも貞享三年頃には、大阪に出てゐたことは明かであるが、(後出)余の推定では、貞享初年には、もう大阪に去つてゐたと思ふ。そして、これより元禄三年頃までの動靜が、明瞭を缺ぐけれども、恐らくは、この間が、柳川、郡山、大野などに仕出た時代らしく、喫飯の處を寛めて、煩悶してゐた時代で、丁度、かの芭蕉が、主家を退轉して後、「暫らく身を立てんことを願」ひ、(笈の小文)「ある時は仕官懸命の地を羨」み、「佛籬祖室の扉に入らんと」し(幻住菴記)て、苦んでゐたのと同じ。どうしても、この出仕したのは、元禄三年以前である。鉦萬の家産をも蕩盡した(?)彼に、さやうな奉公生活は、長續きはせなかつ

たと見える。僅々六年ばかりの間に、三家を轉々したことも想像が出来る。色々やつて見たが、どうも思はしくないもので、一旦また大阪に歸り、芭蕉の所謂、「便りなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、暫く生涯の計とさへなれば、終に無能無藝にして此一筋に繫が」つて落ちくつくやうになつたのであらう。柳川、大野、郡山、これいづれが先で、いづれが後かは、はつきりせぬことであるけれども、今、乏しい材料をあさつて、試みに假説を立て、みると次のやうになるのである。猶、流寓の跡を尋ねると共に、便宜上各地で得た友人をも、附説することにした。

(1) 筑後 柳川

五十年懷舊の記事によれば、貞享の比柳川侯に仕へ、祿三百石を賜ふといふ。柳川侯に仕へた事は、この文書によつて始めて知られた事實であつて、嘯山の跋にも見えない。机月の書いたこの記事を疑ふ人もないではない。柳川家に残つて居る記録には、鬼貫の事が見えないからといふのであるが、しかし、左様いへば、鬼貫自身が、越前大野の城主に仕へ

てといつて居るその大野藩にも何等鬼貫に關する記録は存して居ない。まして、鬼貫の句に

筑後三毛領にて

遠干瀉沖はしら浪鴨の聲

とあるが、これは、柳川在任中の作であらう。卒然として、この句に對すれば、たゞの旅行かと思はれるが、前の事實と併せて考ふれば、その偶然ならざるを知られる。且つ、この句は、大悟物狂に出て居るから、元祿三年までに出來た句に相違なく、右の文書の、貞享の比といふのに吻合するのである。但、貞享の比といふのが、一方、大悟物狂によれば、貞享三年東武に赴き、貞享四年には難波に居たらしく、

貞享四年の春

一の洲へ都の客と馬刀とりに

などの句もあるから、柳川在任は、貞享一二年頃、即ち二十四五歳の頃でもあつたので

あらうか。机月の文に、「元祿のはじめ骸骨を乞ふて郷にかへり」とあるのによると、貞享三年の東武行は、柳川在任中の事となるやうであるが、如何したものか。これらの材料だけでは、決定出来ぬが、兎に角、柳川に居た事だけは、確かにいへるのである。

(2)大和郡山

郡山侯に仕へたのは、七車の跋にもあるが、その時期が分らぬ。机月の説では、柳川致仕後となつて居る。果して左様とすると、貞享二年よりは後になる。貞享三四年元祿三年頃は確かに大阪に居たのであるし、五年は、もう京都に居たのであるから(後出)、まづ元祿一二年頃の事で、もあらう。句選に、

臘月廿日あまり和州こほり山に行とて

鎌とぐや伊駒あたりのとしの暮

といふから、赴任は、年の暮であつたと見える。そして、「和州郡山に年をむかへて」は、

いたゞくや大和正月三笠山

「はじめて和州郡山のきさらぎをむかへては」

君が地の花のつぼみをみそめけり

初瀬に旅寝して

小夜ふけて川音高き枕哉

大和めぐりして

秋もはや宇田の炭がま煙りけり

奈良にて

神々と春日茂りてつゞら山

郡山に仕へたのは、餘り長い間ではなかつたらしい。やがて

骸骨を乞て郡山をたちいづる名残に

たよりなや笠ぬぐ後の春の雨

といふ傷心の句を残して、再び、浪々の身となつた。致仕の原因は、五十年懷舊の机月の

説では、「病を得て退去し」といひ、嘯山の跋では、

壯年の頃、やまと郡山本多侯に仕へられしかど、久しからで母の病めるにあうて、祿を辭し、歸去來を吟ず

とあるが、何れに従つていゝか、判断に苦む。

机月の説では、柳川侯にも本田侯にも、同じく三百石を以て仕へたとあるが、此が、どうも解せないのである。只の町人に過ぎない鬼貫が、果して何の枝を以て、三百石といふ厚祿で登用せられたであらうか。殊に兩藩とも、餘り大きくもない藩である。余は、机月が、その祖をあけんが爲めに、故意に誇張していつたのではないかと想像したこともあるが、又思ふに導引即ち醫として仕へたのかもしれない。然るに、著作堂一夕話では、足輕をつとめたといつて居る。著作堂一夕話は享和年中に、馬琴が京阪地方を旅行して見聞した話を筆記したものであるが、彼が大阪で聞いた話として傳へて曰、

浪花客中或人の話に、鬼貫中頃は行はれさりしにや、ひところ和州郡山侯の足輕など

つとめ、その後大阪にすみて、小兒の導引などとして、かすかに世をわたりぬ。今なほ大阪に鬼貫導引とて、小兒の療治に、足より上へもみ上る按摩の法のこれり。

笠とりて跡ちからなや春の雨

鬼 貫

これ郡山を辭して大阪へかへる時の發句なりといふとあるのは首肯ができぬ。蓋し句選に

老松町

我宿の春はきにけり具足餅

の句があり犬居士にも、

吹く風や稻の香にほふ具足櫃

とあるので、矢張、士分として仕へたやうに考へられる。士分として仕へたにしても、三百石といふのは、どうも首肯し兼ねる。

(3) 越 前 大野

……第一章 鬼貫傳……

七車に、

越前國大野城主に仕へて八月廿一日はじめて彼地に至る

どう寝ても慥な秋の寢覺哉

五月はじめて大野の城下に入て

夏草に馴染初めたる大野かな

の二句があるので、大野の城主に仕へた事を知り得るのであるが、五月といひ、八月といふ、その出仕の月が違つて居るのは、如何いふ譯であらうか。大野藩は、かの有名な土井利房が、天和二年に封ぜられてから、ずっと幕末まで傳へられてきたのであるが、果して何時仕へたのであるか、詳かでない。唯、俳家奇人談に、

一年越の敦賀にて、蕉翁の行脚するに逢ふて、「あるくものと知れば尊し神おくり」といつてある。何に據つたものか知らぬが、もし然りとすれば、芭蕉が敦賀を通つたのは、

奥州地方の行脚、即元祿二年であるから、まづその頃、居たものと見ねばなるまい。この

句は句選には、何の詞書もなく載つて居る。「あるく」が、酒竹氏の全集には「荒る」となつて、「一本あるくに作る」と註してある。いづれにしても、意味は疏通するが、芭蕉を出雲に行かるゝ神に譬へていつたのであらう。七車に曰、

大野より京へ歸る時、敦賀といふ所見まほしくて九月五日彼地に宿し夜更るまであるじと語りて、

弓張のつるがにはなすやどりかな

兩人が、相會した者とすれば、この前書もやゝ注意すべきであらうが、九月五日といふが何時の年であつたか知られないし、又假令、元祿二年の事と見ても、奥の細道には、

鶯の關を過て湯の尾たふけをこゆれば、燈が城歸る山に初鴈を聞て八月十四日の夕ぐれつるがの津に宿をもとむ

とあり。日數に於て、二十日の差があり、齟齬してあはず又芭蕉と相會したとの事も、鬼貫側のものにもなし、奥の細道にも、少しも記事はない。されば、兩人會見の事を信ずる

譯にも行かず、それかといつて、奇人談の説を、遽に否定することも出来ぬ。暫く疑を存して置く外はない。

柳川の條下でも、一寸述べておいたが、會て、福井縣史を編輯せられ、大野藩についても種々調査せられた牧野信之助氏に、鬼貫に關する遺聞、遺蹟、若しくは文書の有無をおたづねしたのであるが、何にもないとの事であつた。だが、鬼貫自身、大野に仕へたといつて居るのであるから、大野に仕へたことは間違はない。聞く所によれば、大野には、在岡といふ姓を名乗る人があるとのことであるが、或は、伊丹の古名の在岡と關係があるのではなからうか。

さて、鬼貫は、この出仕の時代をへて、又大阪にかへつて來たのである。次に大阪と鬼貫との關係を考へてみよう。

三、大阪に移る

鬼貫と大阪とは、その緣故が、極めて深いのである。伊丹を去つて後、まづおちついたのは、この大阪の地であるらしく、嘯山の七車の跋にも、「郷を出でて後は浪速に、暫くは洛にも居を寄せ導引をもて年月を送るのよすがとす」とある。又、終焉の處もこゝにあり、いはゞ第二の故郷とでもいふべきところである。

最初大阪に移り住んだ年は、明かでないけれども、系傳の條に述べたやうに、まづ、貞享二三年頃と見て差支なからうと思ふ。即ち、大悟物狂に、今茲秋七月歸于難波とあり。今茲は、貞享三年を指していつて居るのだから、遅くとも、この年までに、既に大阪に來て居たと見なければならぬ。同書に、

貞享四年の春

一の洲へ都の客と馬刀とりに

といふ句がある。一の洲とは、淀川の河口からいつて、一番沖の方にある澗木の附近一帯をさしていふ。澗木は、すべて十本あるので、それを沖の方から陸の方へ順に、一二と數

へるのである。馬刀はまで貝である。三四年頃は、してみると、大阪にゐたものと見える。

貞享四年の秋長月十七日の夜更行くまゝに庭のけしき人はしらす

今の心是こそ秋の秋の月の

同じ夜寝られぬほどにこゝかしこめぐりて

いとよなく猫の籠に眠るかな

貞享四年霜月二十九日鏡の雪を

鰻喰て其後雪の降にけり

(大悟物狂)

此等の句も、大阪での吟であらう。在岡俳諧逸士傳には晩年游_ニ京師_ニ三五春、門葉最茂……終懷_レ病退_ニ隱浪速_ニ閑樂_ニ餘年_ヲ呼_フ乎_ハ諧中之蟠龍乎。

とあつて、大阪に居たのは、晩年だけのやうにいつて居るが、この記述は、聊か粗笨の嫌がある。逸士傳の成れるは、享保八年即ち鬼貫が六十三歳の時で、この時は、大阪にゐたのであるが、彼の大阪在住は、この時だけではない。或は京都に住家を求めては、

京に住所求めて

北へ出れば東へ出れば花のなんの

との句もあつて、京都に住んだり(この事は又後にいふ)或は又、大阪で暮したりしたのである。そして、同じく大阪といつても、所々に、其の假寓を移した様である。そして、この大阪在住の時代が、鬼貫の窮迫した時代だと、普通には傳へて居る。今、この事について少しく、考察を加へて見よう。

元祿三年十月に刊行せられた犬居士によると、大阪汐津橋附近に居を定めたことが分る。犬居士に曰、

八。月。三。十。日。大。阪。の。市。を。立。て。山。居。を。は。な。れ。里。蒙。の。閑。なる。を。好。んで。福。島。に。心。を。動。し。み。つ。か。ら。犬。居。士。を。呼。び。て。俳。道。を。ほ。ゆ。尾。も。な。く。ま。た。頭。も。な。し。家。は。汐。津。は。し。といふ。橋。の。ほ。と。り。也。前。に。は。軒。の。松。風。流。水。に。ひ。た。し。て。な。ほ。ひ。や。か。に。後。は。野。徑。の。む。し。時。し。も。野。分。に。吹。送。り。て。お。の。れ。く。が。聲。か。す。か。な。り。今。は。闇。な。れ。ば。や。が。て。月。の。た。め

にはとたのしく覺えて、

闇がりの松の木さへも秋の風

汐津橋は、現今も蜷川にかゝつて居るのであるが、鬼貫時代も、恐らくは變らぬであらう。天保十四年の古圖を見ると、現今と同じく、東からいつて、梅田橋、淨正橋、汐津橋、堂島小橋となつて居るし、元祿十六年の圖には、淨正橋がない。この汐津橋畔の僑居の眺望を叙して、

右には武庫淡路のつき遠く聳えて、左は伊駒かつらぎの峯はるかに高し。來れる人もなければ、物埋む雲もなくうち晴て、致景こと／＼く歴なり。

わせるなら霧のない間に誰も哉

むかふは堂島の新地、家立ならび舟きほふ。堀江の川嵐に、西海の浪を忘れ、入日を惜む歸帆、半は屋上に見こして、すがたしらぬ旅人のわかれをおもふだに、此夕はさらにもかなし。

須磨の秋の風のしみたる帆筵か

(犬居士)

行文暢達、措辭平明、自ら淡雅の趣を藏して、水郷の風光、さながら描けるが如くである。「須磨の秋の」句の如きは、毫も談林調の痕迹を止めず、悲涼の氣、沈鬱の態、全く蕉風の佳什である。こゝに、堀江といへるは、即ち堂島川を指していふのであつて、鬼貫の假寓のある蜷川の對岸である。猶、犬居士に、

明れば長月朔日、家せばくておほからぬ道具さへ、おき所なく、そこそこに棚などつらせて、晝のころまで陋し。やう／＼ほこりはき捨て安坐す。

吹風や稻の香にほふ具足櫃

かくて、三日には、來山の師なる瓢叟(由平)が、訪ねて來たので、

六句の吟

出て聞ばおぬしがいひし秋の風

甲 平

月も持たりこちの松の木

鬼 貫

天地の雑の露さへ季になりて
書をさめては筆に文字なし
晦日と心のつけばつごもりよ
苔んだるかな雪國の桃

同 平 同 貫

越えて五日には、來山がおとづれたので兩吟歌仙を試みた。この時の、歌仙の初表だけ抜いてみるに、

秋風や男所帯に鳴千鳥
月のあかりに舟焦る濱
石橋を洗ふも毛見の用意にて
双六うちもいぬるなりけり
朝まだき目に付物は酒ばやし
たづねてきませ飾つる宿

來 山 同 同 貫
鬼 貫 同 山 同 貫

七。日。には、盤水が來たので、共に野徑をそとろあるきした。

秋風の野中に細し鶯のよろ

盤 水

秋風の吹渡りけり人の顔

鬼 貫

九。日。には、

機しねを網にしたりや栗袋

十五。日。には、新居を見ると、虚風、文十來訪。來山の門人である。歌仙を卷いた。

この家は前も後も月夜かな

虚 風

胸につかへん新米の食

鬼 貫

馬合羽こそつく物は秋風よ

文 十

色の白いはどんな鎗持

風

泥龜の胴がらすつる朝朗

貫

日の影うけて熱土糞

十

さて、句選に

福島住居のとし

冬もまた松の木もつてむかひけり

とあるのも、元祿三年の冬之作であらう。假寓の近くには、老松が多かつたと見えて、松をよんだのが多い。猶、大悟物狂にはなくて、只句選に見えてゐる丈ではあるが、

野田村に蜆あへけり藤の頃

とあるのも、福島在住の頃の句ではなからうか。野田村は、西成郡に在つて、福島とは地続きである。今は、大阪市西野田町になつて居る。藤の名所で、俗に野田のかけ藤といつて名高いものであつた。西園寺公廣の歌にも、

難波瀉波野田の細工を見渡せば

藤波かゝるはなの浮橋

といふのだから、餘程美しかつたに相違ない。今は、唯々春日神社の境内に、數株の藤を

残すのみで、昔の俤を偲ぶべくもないのである。かけ藤といふのは、障子に映る藤花の影を、座敷の中から見るので、昔は、かけ藤を見にこの境内へも、随分人がきたので、境内の茶店では、蜆汁や蜆あへを名物としてくはしたものであるといふ。さて、前に引用したやうに、彼は市井の熱鬧を厭ひ、里蒙の閑なるを好んで、「大阪の市を立て」、福島に移つたといふのであるが、福島に移るまで住んでゐた所謂「大阪の市」とは、何處であらうか。これとて、明確な事は、いはれないが、老松町あたりに住んで居たものと思ふのである。それは、句選に、

老・松・町

我家の春は來にけり具足餅

の句にも、具足餅とあるし、前に引いた句にも、具足櫃とある。老松町から、即ち「大阪の市」から、移るときに、具足櫃をもつてきたのであらう。七車に「一桃子におくる詞」といふ文がある。曰、

東武一桃子と聞えし人は、はるかなる唐土舟の流れより長崎の府生也けらし。一とせ難波津の梅のほひをしたひ、一帆の風に身をまかせて、あまみつや老松の名をもたる所に住みとまりて、富める人、落葉かく人、あまねく長生の救ひをしたまひぬれば不老を願ふ人すら、門前に市をなさずといふ事なし。予もしばらく軒をならべる友となるより、筆をして物はいはせよかしと、戯れにたはふれ侍りて、一句をたはふるゝものなり。

朝風や菊のうなづく菊の露

あまみつは即ち天満である。その天満の老松町に、一桃子が、長崎より移り住んで、醫者をしてゐたのであるが、その隣に鬼貫が住んだといふのである。「我家の」句は、そこで詠んだ句である。この一桃子といふ人は、どういふ人であらうか。大阪に在る間は、鬼貫は、導引をして暮したといふのであるが、それは、著作堂一夕話にも、七車の跋にも引かれてゐる。それらは、いづれも後の書であるが、鬼貫の親友なる來山も、「寺島の記」に於て、

その事を述べて居るから、確かな事實である。(寺島の記は後に引く)。そして、それは、嘯山の説では、

其の術たるや、もと明人某國の亂を避けて、瓊浦に投せしを、道古なるもの親み隨ひ蹟を探りて、其の枝をうけ授りぬ。翁は、即ち古が高弟にして、藍より出づるの妙あり。(七車跋)

瓊浦は、即ち長崎である。一桃子も長崎に居たとある所を見ると、どうも、この一桃子が、道古らしく、そして、この老松町にゐた頃に、近隣である所から、就いて學んだのではないかと思ふ。道古は、鬼貫の親友であり、多少風流の志もあつたと見えて、道古と母とを伴うて、鬼貫が京都の高臺寺に遊んだこともあり、その時に道古から、發句を所望せられて一句よんだことは、前に述べた通りである。句選に、

卯月廿七日道問といふ醫師の新宅にてほ句望まれしを

此軒にあやめ葺くらむ來月は

道聞といふのも、道古と名の似て居る所から見れば、道古と師弟の關係でもありはしないかとも思ふ。導引の技に秀で、藍よりいづるの妙があつたことは間違なきさうである。开は、來山も、

爰に醫あり。其妙術は、京の鬼貫傳授せしを我よく知れり、世人もよくしれり。

といつて居るので間接に推察せられる。それで、伊丹から、大阪に移つて、始めに老松町に住んだものと思はれる。

天滿祭を拜みて

菅原やみこし太鼓の夜の音

天滿には西福寺がある。鬼貫の師たる宗因の墓がある。宗因は、天和二年三月廿八日歿したのである。句選に、

宗因墓

宗因は春死なれしが秋の塚

宗因の墓を拜したのもこの頃であらうか。近松の夕霧阿波鳴門で、名も高い夕霧の墓を訪ねては

夕霧が塚にて

此塚は柳なくてもあはれなり

閑立和尚におくる詞

難波津や、天みつ北のかたほとり、砂原といふ所に、西方便と聞えし隱逸の行者あり。柴の扉をとぢて、甘露王につかへ、庭わづかなるに、こと草をやしなひ置きて、をりくごとの花を捧げ、明暮御名をこがる、聲の、いとたふとかりければ、垣のそともをゆきかふ人、袖に露おかずといふ事なし。すべて、此の世に生る、輩、死ぬる例をしり顔なるものゝみなしらぬにやあらむ。必ず死する例ある事をひじりにとつてしれ。

まげよ蒔け佛の種も彼岸から

これも、老松町時代にできた友人であらう。

又、七車に左の句もある。

閑立和尚牲川充眞に馬の繪をかゝせて予に讃を望まれし程に書いて遣しける

娑婆の荷と何月花もはなれ馬

よほど、親しい間柄であつたと思はれる。また

秋月明白く候詠歌の御心持無御座候や池の汀に集會仕度候

右は松島雲尾和尚の手跡にて持ちけるを閑立和尚にまゐらせける時、發句して

書付けよとありけるに

月影や雲居は消えず鳥の跡

猶、かの椎本才鷹も、初めは、江戸に住んで居たのであるが、後に大阪に来ては、天満に住んだのであつて、才鷹も亦、宗因門に入居たから、鬼貫とも相弟子である。尤も、才鷹は、西武にも、西鶴にも、随つて居た。かの在岡逸士傳には、椎本少文舊徳といふ名で序文をかいて居る。少文は字、舊徳翁は別號である。七車に、

如月十日鐵卵懷舊俳諧百韻興行

うたてやなさくらを見れば咲きにけり

鬼貫

月の朧は物たらぬ色

才鷹

盃の跡も春なるゆふべにて

來山

此連中は鬼貫才鷹來山補天虛風西鶴萬海執筆七吟なり

鐵卵は、伊丹の俳人で、上島青人の弟で、鐵幽とも號し、元祿二年十月十日、二十八歳にして歿した。その追善の俳諧で、元祿三年に興行したものである。後、正徳四年、月尋が、自分の句と伊丹派俳人との句を番へて、才鷹に判を乞うて、伊丹發句合として刊行した時鬼貫も跋をかいて、才鷹の判を賛して居る。

跋

伊丹の發句合といふものを、月尋が懷より出して、予に跋を乞ふ。みれば、かの里の好士等の句に對して、獨り四七の數を番ひたるなり。其すがたは、面の如くにして、

おの／＼一様ならず、天性の得たるをもて、おのづからの風情となるに似たるなるべし。才鷹が評は、幕をもて花を粧ひ、船をうかべて、月の見所を求るが如し。難波津や、梅の翁の匂ひたえず、柿園の翁の雫かはかずして、實青からず、澁からぬもの、是の月尋ならんかし。

槿花居士 鬼 貫

さて、文献に表はれたところでは、大阪に關する記事は、元祿三年前後で、一旦中絶してをり、而して、一年たつて、元祿五年には、既に京都に移つて居るのであるから、大阪の在住は、元祿四年頃迄であつて、恐らくは、元祿五年の春には、もはや京都に移つたことと思ふ。この頃の友人には、蕉門では、舍羅がある。其の編輯に係る江鮭子に鬼貫の句が出て居る。(元祿三年刊)

中の秋十日あまり之道芭蕉翁をたづねて行日後のなつかしきを

伊丹 鬼 貫

橋よりも戻る心を瀬田の奥

空いそぎする秋の船衆

之道

後戸の月の有間に喰喰て

同

膝へ飛しは青蛙なり

貫

羊蹄のあたりや風の吹ぬらん

同

丹波太郎が聳晝時

道

第三満て

珍 碩

棹柿や鞠のかゝりの見ゆる家

秋めく風にゑり干門

之道

有明に湯入中間の荷を付て

翁

發 句

秋風の吹わたりけり人の顔

伊丹 鬼 貫

石山の石の形や焔の月

鬼貫

又、それより十年程後、即ち元祿十四年卯月五日に出た荒小田も、矢張、舍羅の編したものであるが、それには鬼貫が、跋を書いて居る。その詞に曰、

あら小田といふ集を作つて言葉の種をまけば花あり實有桃々坊は是俳諧の鳥追

佛兄跋

これで見ると舍羅は桃々坊とも、號したと見える。鬼貫の句も載つて居る。

皆旅泊

長き夜を疝氣ひねりて旅寝哉

佛兄

ひうくと風は空ゆく冬ぼたん

節季候や白こかしきて間がぬける

一日で花に久しき裕かな

舍羅は、之道、諷竹などの別號があつて、鬼貫の句に、

水無月の頃舍羅が剃髪しけるを

國々を秋になつたら見にまはれ

一體、舍羅は、其の傳記が、至つて明かでないのであるが、何時剃髪したのかも、分らぬが、この外に、支考の剃髪文に、

浪花の舍羅、剃髪の前も舍羅といひ、ていはつの後も舍羅といふ。此舍羅を捨て、

どの舍羅をか求めん。舍羅々々として、更に舍羅なし。

一たびは瓢の花のあたまかな

此は、風俗文選の卷七にも出て居る。前引鬼貫の句にあるやうに、剃髪後は、抖擻の身となつて、江湖に放浪したと見えて、

九日洛外にて

菊の日や旅の寢覺の鶴の聲

舍羅

粟島を過て

……第一章 鬼貫傳……

獨すむ賀田のわらやの砧かな 舍 羅

備前牛窓にとまりてかり寝せしに蚊屋は破れてなきにひとし旅はうし窓て月見
る今宵かなと宗祇のあはれも思ひやられて

夏の夜の月や宗祇の水茶碗 舍 羅

おなしころ岡山に入りて

先風(まへかぜ)にふかれ初るや若楓 おなしく

魔耶(まゝ)にて

長旅のんあたらしみ夏しけみ シヤラ

魔耶は、麻耶であらう。また近江をすぎては、

水莖岡にて

葛水をのみても宿る木陰かな 桃々坊

備中井原といふところを過るに

俳諧の道くさにせん茶挽草 舍 羅

書寫にて

石も木も自然とふるし夏の露 舍 羅

さぬきの國に行脚せし時一夜庵といふ庵にやすみて汗を入れれば海有松あり。い
とおもしろき景地なり。そもく此いほりは宗鑑のむすはれて我老衰のありさ
まを木にきざませなどして今も庵のあるじとなしぬ。

涼しさや瘦た柱の草の庵 舍 羅

かうして、諸國行脚の旅に上り、中國から四國まで渡つたやうである。洒落な人物で、
奇行に富み、惟然に似たところがあり、惟然とも親しく、惟然が、大阪にゐた時も、始終
往來して居つたと見えて、

鳥落人のがりにて

曇るほどなをたのもしや後の月 舍 羅

の句もある。烏落人は、惟然の別號である。大阪に於ては。陋巷に居り貧窶の中に處して
毫も憂ふるところなく、「貧と雅とに名を得たる」(俳家奇人談)俳人であつた。

蒲の穂やこけかゝりたる軒の妻

以てその一斑を推すべきであらう。北枝、曾てその風流を聞いて、草菴を訪れたが、終日
の清談に、北枝は漸く飢渴を覺えたが、くふべきものがない。傍にある紙袋に二合の米が
ある丈で、しかも、その二合で、主客四人の口腹を養ふのだから、充分には差上げられぬ
といふ舍羅の話をきいて、北枝も浩嘆したとの話がある。又、句空に遣した手紙に、

去べき處に遊吟して歸り見候へば、隱者臥所に夜盜入たりとて、邊りのともがら訪ひ
わめき候。入べき所も有べきに、仕合のなきものにて候。されど、是ぞと心掛たるに
や大事の盃なくなり候へば、「盜も酒がなるなら朧月」とまうして打臥申候。其頃惟然
坊この地に居られ候て、「ぬすまれて手柄と花に何處なり」と

とあり、その酒脱にして物に拘らざる、全く、惟然そのまゝである。この二つの逸話は、

俳家奇人談、及び、俳人百家撰に出てるるので、絶対に正確とはいへないが、まづは、大
した誤はないと見てよからうと思ふ。この二人の俳風が、よく似て居り、また、鬼貫の人物
も俳風もこの二人と相通ずるところがあるのも偶然でない。口語を盛に用ゐる、流麗圓轉、
諧和を旨とする點に、三人は、全く共鳴したものゝ如くである。それは、最もよく、「荒小
田」に表はれて居る。この三人の俳風の相互關係は、重要なことであるから、項を改めて、
後章に於て、更に論ずるであらう。

四、京都に住す

始めて、京都に移住した年は、詳ではないが、七車の卷五に出て居る高すなご集序には、
元祿五年季夏の日、堀川の馬樂堂書きぬ。

とあるので、もうこの年には、京都に出て居たと見える。句選に、
二月二日京に住ところ求めて

花へ出れば東に出れば花のなんの
七車に、

新宅のよろこびに俳諧興行

まづ恵方みのさちよろしいなり山

いなり山は、伏見の稻荷山であらう。句選に、

京に住むことありては古郷を離れける春の末、友に向うて申出でける

春雨のふるにも思ふ思はれう

これらの句は、みな春の季になつてゐるが、同年の作であるかどうかは確言はできぬ。「元祿よつ」とし、鬼貫の名を馬樂堂にかはつた(佛の兄序)といふが、京都に移つたのでそれを機縁としてかはつたのかもしれない。さうとすれば、元祿四年にうつつたものかとも思ふ。逸士傳に、逸年游_三京師_三三五春、門葉最茂。日々説_三於俳諧正風_一とあつて、晩年だけ京都にゐたといふやうに見えるのであるが、左様でない。元祿五年は、彼が三十

二歳の時で、この頃から晩年まですんでゐたといふのである。元祿五年から、十五年までの十年間は、在京の事を窺ふべき資料がない。十六年には、京都にゐたことは、七車に、

伊勢の涼菟きさらぎの末京にのぼりて是より北國行脚おもひ立侍るといひし程

に錢別

蛙鳴くこの夜忘るな旅まくら

の句がある。按ずるに、山中集の序文によれば、涼菟が加賀に遊んだのは、元祿十六年であつて即ち、浪化の歿した年である。故に、この詞書にある如く、この年には、京都にゐたことが分る。してみると、その前年に出来た古園俳格の跋も、「富士を右にして」來り、「富士を左にして去る」といふところから見て、矢張り、京都にゐるの作と思はれる。その文は、七車に出て居る。

泉宇盤只、ことし仲夏の頃、富士を右にし、頭を俳諧に傾け、足を訪尋の車にして、

……第一章 鬼貫傳……

なす所古園俳格、是を抱いて、初冬又富士を左にして去る。

元祿十五壬午初冬

犬居士 鬼 貫

泉字盤只といふ人は、これで見ると關東の人らしいが、どうも、よく分らない人である。猶、十六年には、出雲の俳人丸山が、實花集を編したるに際して序して曰く、

……(上略)こゝに八雲たつ國の丸山子、ことし彌生の中比、九重の東山に席をまふけて、百韻興行の日、そのかたちたゞしく、禮を上にかさね、像を下に着す。かの御抄に、公任經信の兩卿もしらざるとか聞えしを、此人は知にやあらん。實花集と題號して、予に序せよといふ。恐しけれど筆をとらばや。

元祿十六癸未の年花左下繪

因に云、丸山子とは、いかなる俳系に屬する人か、詳かでない。鬼貫はこの年には、轉居したやうである。开は、七車に、

玉腕子は、惠林大徳のたまはりける名となん。そのみならず、あまたの禪師

詩をおくり、文をよせられて譽ある筆工なり。元祿みづのとひつじ卯の花月のはじめ、其の隣に居をうつして、やがて心おかぬ程になりければ、發句してくれよかしといひしほどに、

月も雪も何か残らう花も筆に

とある。元祿みづのとひつじは即ち元祿十六年である。しかし、この玉腕子なる筆工は、如何なる人であるが、全く分らない。惠林大徳とは、甲斐の惠林寺の大徳といふ意味であらうか。玉腕子といふ名も、随分妙な號である。この人の住居の位置が分らぬから、従つて鬼貫の僑居が、何處にあつたかも、推定することが出来ない。しかし、後に述べるが如く、寶永二年の郭公の卷の跋では、洛の永昌陽鬼貫書とあるからして、三條から四條までの邊に家してゐたやうであるところから推して、この元祿十六年の假寓も、そこでないかと想像するのであるが、何しろ、飄々として、うつり歩く人のことであるから、確言することは出来ない。

元祿十七年も、矢張り京都にゐたことは、「ひとりごと」に出てゐる左の記事で知れる。曰、

元祿十七年の春、きさらぎのはじめ、或人のもとへ行けるに、床に貫之の像をかけて、發句所望せられし時、折ふし空かき曇て、こさめ降ける中に、籬の梅のしろく咲て、そこらおほつかなき程に見え侍りければ、

雨雲の梅を星とも晝ながら

といふ句をつかうまつりぬ。かれこれ案じめぐらしける中に、ふと蟻通の諷をおもひ出して、よき趣向とらへたりとて、取あへず仕立たる句にて侍り。惑説をも辨へずして、うかと心得たれば、かくあやまりなる句をも仕出し侍りぬ。すべてむつかしき句を案じ入たる時、よき趣向のうかみたるは、日でりに雨得たらんこゝちして、やがて句に作り侍る事、大かたの人の常にて侍る。其時、今一かへし返して、心のうちに吟味有べき事にこそ。

そして、七車の方には、

きさらぎ五日、大佛のほとりに、高森正因が許にまねかれけるに、をりふし雨ふりあがりて、空のけしき未だ晴れざりけるに、庭のかたへなる梅の花白く匂ひ、床に貫之の像をかけて、發句所望ありける即興

雨雲の梅を星とも晝ながら

と出て居る。ひとりごとの、或人といふのが、高森正因であることも分り、又それが、京都の東山の麓、大佛の邊にゐたことや、従つてそれを訪うた鬼貫の京都在住の事も推して知られる。高森正因は、享保三年四月十九日に歿した人であるが、その俳系などは、明かでない。同じ七車に、この句のすぐ前に

正月廿日高森其愼の許へまねかれて同氏正因一座しけるに發句所望

老いせじと來初めたに日も遅かれな

この詞書で見ると、正因と其愼は親戚でもあつたやうである。同じく七車に、「雨雲の」

句のすぐ後に、次の句がある。

お。な。じ。く。二。十。五。日。北。野。の。御。神。へ。奉。納。す。と。て。柳。水。所。望。

梅をしる心もおのれ鼻もおのれ

北野は、いふまでもなく京都の北野である。柳水は、中路柳水であらうが、彼は始めは桃隣の門人であつたが、後には丈石の門下となつた。京都の人である。彼は、寶曆八年五月十五日に、享年六十七歳を以て歿した。彼の大元式の巻頭には鬼貫が序文をかいてをる元祿十七年は、即ち寶曆元年である。寶永二年は、鬼貫四十五歳である。

四十五になりける元日

花といはさ老の五つのかぶりほろ

の吟あり。七車に出てるる郭公の巻の跋に曰、

支考ほととぎすの盃に酔うて西に行けば、座神うのはなの匂ひを、しむ。是を束ねて序は素堂がすみに、すゞりの墨ぐるに書きぬ。

くわい／＼と夏の蛙の鳴かずもと

寶永二乙酉の夏日洛の永昌陽鬼貫書

即ち、この頃は、京都の永昌坊にゐたのである。永昌坊は、平安城の町割の舊名で、今の三條から、四條までの間をいふ。元祿五年に堀川にゐたといふ所から考へれば、三條堀川邊に住んでをつたのではあるまいか。

翌寶永三年は、芭蕉の歿後、十三周年に相當するので、遺弟支考は、三月十四日に、十三回忌を、洛東双林寺に於て營んだのである。支考の告文によれば、

弟子かつて七年の魂をまねきて、湖南に十百の韻をおさめ、ことしは洛東に六々の韻をついで三日の法樂をなさむとするに、身貧にしてその志をとげざらんとす。伊勢が家賣るふち瀬のおもひにはあらで、宗祇の質といふもの置給へる一ふしこそおかしけれとて、

幻住庵記 二見文臺

……………第一章 鬼貫傳……………

寧一山畫贊 古翁畫贊

徒然讚

此五しなの物をしろなして、此たび供養のあるじとはなれりけり。

といつて居る。この時の追善集が、東山萬句であるが、その卷首の京都招待の條に、

言 水 一日出座 鬼 貫 二日出座

春 澄 異議有斷 轍 士 芳野行脚

と出て居る。句選には、

三月十日芭蕉翁懷舊、支考萬句興行に

かけまはる夢や燒野の風の音

の句が出てゐるのは、この時の作である。いふ迄もなく、旅に病んで夢は枯野をかけまはるの句をふまへてよみ、追悼の意を表はしたものである。「東山萬句」によると、三日の興行であつたが、二日まで出席したのである。芭蕉の直弟子でさへ、列席しない人があるの

に弟子でもない彼が二日も出るといふのは、よくよくの事である。

中 日

かけまはる夢や燒野の風の音 洛陽 鬼 貫

いをなら桃の散に一段 千 及

小袖にも別れの櫃に鎖さして 立 吟

ざつと掃てもこゝらさつぱり 酒 人

念比におもやこそなれ腹もたて 雪 夫

水を釣瓶のそれがしつたか 東 明

月涼しけふは見直す瓜のつる 柳 水

とやかくいへばよつぼどの道 執 筆

其 二

佛やにがみも残る髭野老 洛陽 立 吟

草鞋はどこに虎杖の杖
 應々と呼子鳥なら来もけらし
 おこされて起て闇にから牛
 ほつちく碁石のひよく薄月よ
 位つめなる腹の冷やう
 何にその秋にかたちはなけれども
 水切はなす刀するどき

其三

手向ばや我もなじみの山櫻
 鶯何を落涙の聲
 打煙る麓は霞むし出して
 此比うちの催しがふる

武城

如流 鬼貫 水車 吐月 一翠 千及 執筆 如流 水軍 長雄 立吟

棧敷のちかい所を二間取
 によきく垣に茨麥の穂
 かならずといふたが月へもちこすか
 いつはなれにぞ秋の空の氣

竿八

花見むと別の十日よ雨のほど
 風の柳の何とやらかしく
 春はたゞかなたこなたに家たてゝ
 大事といへば皆大事也
 どこへやら此川水の行衛なき
 食のすゝむで先はめでたき
 談合もいらじと月の夜もすがら

津國伊丹

長息 一翠 鬼貫 執筆 文孝 之日 東明 柳軒 酒人 座神

それその時のむしの聲々

執筆

其 九

笠着ての杖をついての朧月 津國伊丹座 神

折人わすれず出る穂わらび 酒 人

風もいつやはらぐとなふ和らかに 東 明

初音の耳もさらえふぞやれ 鬼 貫

隙なとてをれほど隙で居るものは 雪 夫

明星の井戸に峰の松が枝 如 流

火袋にとり合せもの風雅也 立 吟

けふは朝から裕でもよし 執筆

越えて、寶永六年十二月には、東山上皇が、崩御になった。翌七年の春に行はれた御大葬を拜し、

東山院大葬を拜して

御車はやみの月夜のなくね哉

の吟あり。鬼貫四十九歳の時である。この年以後は、矢張り京都にゐたのか、確かな資料とて別がないから、よく分らぬが、在岡逸士傳に、

晩年游_ニ京師_ニ三五春、門葉最茂、日々説_ニ俳諧正風_ニ。時編_ニ獨言_ニ一卷。門人某請_レ之以興_ニ書林。凡都鄙之編集、無_レ不_レ以_ニ鬼貫_ニ。

とある。晩年といふのがいつ頃までか明かでないが、正徳年間に入つてから、京都にゐたらしい記録はないやうであるから、まづ正徳末年には、

終懷_レ病退_ニ隱浪速_ニ閑樂_ニ餘年_ニ。

といふことになつたと察せられる。遅くとも、享保元年には、再び大阪に歸つてゐたことは、確かである。(後出)伊丹の出身なる百丸も、同じく維丹の門人であるが、彼も鬼貫と同じく、鉦萬の資財を烏有に歸せしめた洒脱なる俳人肌の人であつて、矢張り、故郷を離

れ、京都に流寓してゐたやうである。そして、因幡堂(烏丸松原)の附近にゐたと見えて、百丸因幡堂のほとりに閑居をうつす。むかふに人家もなく、常盤木を覆うてみどりなり。

秋はまづ此宿ゆふべ朝ぼらけ

そして享保七年には伊丹にかへつてゐたことは逸士傳の耳廣の條に總角時予(百丸)遊ニ京師、屢經ニ歲月。故與レ廣未レ語。既及レ退ニ隱舊里、廣還在ニ東武。素居恰如ニ參商。是載ニ壬寅初冬下紘、偶會ニ華岳精舍。邂逅初接ニ芝眉。

華岳精舍といふのは、墨染寺の山號である。

因に云、百丸は、歿年は爲かでないが、鬼貫に先だつて歿した。

百丸追悼(七車)

西行は花の下にて我れ死なんとよみて、其のきさらぎの中の五日に、永く世をねぶれとかや。百翁は、上人に一日遅し。歌人俳人ともに、かのきしにいたりて、蓮を同

じうせん事をこそ思ひやり侍れ。

落日や釋迦もうしろに入さ山

二月十六日に歿したらしいが、惜しい事には年が分らない。百丸の妻は、百丸に先だつて世を去つたと見える。それは、鬼貫の追悼の文によつて窺はれる。百丸の妻は病んで、故郷伊丹に歸つて、療養してゐたのであるが、鬼貫は、京都を退いて、故郷に歸り、之を見舞つて、『持病御快、頓て都へ』などいさめ侍れば、といつてゐるところをみると、百丸は、まだ都にでもゐるやうな口振りであつた。

百丸が妻の身まかりしを聞いておくる悼みの詞

此の佛、百丸と現のかたらひしける頃よりむつまじく、花にほひ月さやかなる時々、九夏の風、玄冬のふすまにも我が軒端をとひ、彼の家に行きて心おかぬ程にありけるを、我れや今年の春、さる事ありて京に住離れぬ。彌生の中頃、故郷に下りてまみえまつるに、はやあす歸りなん、持病御快、頓て都へなどいさめ侍れば、うちなみだ

ぐみて、いらへもなきほどに見えつる。今のおどろきに思ひあはせて、あはれにたへがたうこそ侍れ。

春の夜の面ざしもなし夏の月

(七 車)

「我が軒端をとひ、彼の家にゆきて心おかぬ」親密な間柄であつたのである。鬼貫がいふ「今年の春……京に住離れぬ」といふのは、百丸の妻の歿年が明かになれば、すぐ判明することであるけれども、それが分らない。併し、京に住離れたといつてあるから、享保の初年の事でもあらうか。單に、住離れたといつて居るのみであるけれども、大阪への移住と見て、誤はないと思ふ。菊岡沾涼の撰に係る俳諧綾錦に次の如く出てゐる。

二 維 舟

京	同	大	京
言	鬼	弘	重
	貫	永	方
水			

この書は、享保十七年刊行せられて、そしてそれに大阪とあるのであるから、愈々確かである。故に、大づかみにいへば、元祿五年頃より享保初年まで即ち三十二歳頃より五十六歳まで、約二十年ばかりの間は、京都で暮したと見てよい。従つて、嘯山の「中頃洛の堀川に寓」したとの説も大體當つて居る。隨齋諸話に出て居るやうな話も、京都にゐた間の事であらう。即ち、近衛家へ、鬼貫が伺候した時、折柄歌會が催されてゐたが、召されてその席に出た。丁度、床には、小町の掛地があつたので、早速

あちらむけうしろもゆかし花の花

といふ賛をした。公卿連は、今日は三郎兵衛にいひかたれたから、もうよさうといふことになつて、それで歌會も中止になつたといふのである。成美が大江丸の話として記してゐる所である。この句は、七車にも出て居る。その外に、七車に、

半面を見せたる小町の繪に

かたかほや見ぬ奥山のはなの色

……第二章 鬼貫傳……

の句もある。小町の像が、すきであつたと見える。一體小町の像は、今大路兵部大輔光成から譲られたのもつてゐるのである。貰つたのが、元祿十一年であるから、これも在京中の事で、兵部大輔といふところからみると、勿論公卿であつたに違ひない。

惠心僧都の作とや、烏丸光廣卿の讃有りける小野の小町の木像を、今大路兵部大輔光成のもとより乞ひ求めて、元祿十一戌寅臘月十七日俳諧興行

花の色はからびはてたる冬木立

この木像は、もと村田無禪から光成に傳はつたものであるが、享保五年に養雛齋九間に與へた。(小町の木像を九間にゆづりける副文參見)。その時の吟は

木がらしの底に花行く老の浪

鬼 貫

京都の在住は、かくの如く長い間であり、しかも、壯年の事であつたので、京都でよんだと思はれるものが、餘程多いのである。

洛東の溫柔郷、宮川町に遊んでは、

飛 鮎 の 底 に 雲 行 く 流 哉

都の東北、山青く水白き獅子谷をさまようては、

涼 風 や 虚 空 に み ち て 松 の 聲

忍證上人の所望にて獅子谷眺望

麥の穂も赤らむものを法の聲

この二句とも、季も同じく、下五などもよく似てゐるが、恐らくが、同時の作ではなからうか。忍證上人といふのも、法然院あたりの僧侶ではあるまいか。涼風やの句の如き、遒勁にして緊密。如意山の麓、北白川の邊、老杉古松、鬱々として、青傘を半空に翳し、夏日も尙肌寒きを覺ゆる處、松籟稷々、琴竹の韻を弄する別乾坤が、そよりに、思ひ浮べらるゝのである。鬼貫の七百餘句の中、最もすぐれたるものゝ一つである。

又、北野の社にあそんでは、

正月七日雲雅と北野不動の茶店に遊びけるに、はや入相のおとづれまうづる人

も少なくなりけるに、發句せよといひければ、とりあへず
またむ月入相のかねに人ぞ散る

これは、京都の北野であるが、次のは、大阪の北野であるかもしれぬ。

北野にまるつて

むすび葉に心ためたる宮居かな

賀茂川の澁、糺の森の蔭に涼んでは、

日盛を花とみたらしあすもこん

圓山なる祇園の社に参つては、

あはれけもいにて春たつ朝千鳥

祇園の御輿洗に

鳳凰のいく度ぬるゝ名残哉

圓山に隣れる靈山にては

雲水や庭行水におちかゝる

法然上人の昔より由緒古く、常住不斷の唱名の聲、梵唄の音も尊き金戒光明寺に詣で、
は、

盛なる花にも絶えぬ念拂かな

鳥羽の繩手を通つては、

空に鳴くや水田の底のほとゝぎす

城南の名刹、黄檗山萬福寺を過りては、

ありのみのありとはなしの花香哉

木の葉落ち盡したる冬枯の頃、宇治に至り、阿字池のほとりに立つては、

冬枯や平等院の水の面

宇治に来て屏風にゝたる茶つみ哉

宇治川や朝ぎり立てふしみ山

天王山の麓、山崎の里では、

木神せよ油しめ木の音ばかり

長い間には、京都から、伊丹にかへつた時であつて、

京より伊丹へ行く

水無月や風に吹かれにふるさとへ

また、宇治の西方寺を訪れては、

知れる者の尼のねがひありて、西方寺にこもりけるを望みにまかせつかはしに

とて卯月三日かの寺に行きて

我れはまだ浮世をぬがでころもがへ

また、

仲夏の頃京に住みける日野屋何かしといへる兩替屋に行きける日發句望まれて

即時

さみたれに金はしめらぬ手わざ哉

京都在住が長かつた爲め、多くの知己を得もし、また京都を通過する俳人などに始終會ふ機會も多かつたと見えて、

大阪に住ける鏝太といひしもの妻を失ひて後京にのぼりて、我に發句してくれ

よかし石塔に彫附て、手向たう侍ると願ひしをあはれに覺えて

たちばなは其日其日をむかし哉

伊丹より年々東武に通ひける人、ことし花のつぼめる頃、我れを尋ねて、京に來りけるほどに、久しく過ぎし昔をもかたりなんと、引きとどめて

武士の數こそなけれ花ぐるま

出雲國風水、東武に行かなんとて、京にのぼりけるにあひて

八雲たつ京に秋たつ富士にたつ

風水といふ俳人は、出雲の日御崎の人で、空原齋と號した。そして、寶永五年九月廿二日

を以て歿したので、鬼貫は、

九月廿二日、出雲の國の人、風水が死去せしよしを聞きて、

秋とつれて神に出るかす身はいづこ

の句を以て、弔うて居る。

鯉水といふ人、京に在りて、我許に尋ねよりて、俳諧の物語などしけるに、やがて、伊豫國に歸りなんとはいへるほどに、書いて送りける

秋風を我物顔や旅ぶくろ

久しく逢はざる人の京に上りけるが、ちかき内に江戸へかへりなんと聞えし名残りに

行く馬の跡に花なし菊の空

十月十三日伊豫國羨鳥京に登りて興行

夕陽のさすがに寒し小六月

羨鳥は、京都の北條團水の門人で、仙翁亭と號した。伊豫簾の著がある。

身にわづらひある人の、養生すとて京に登りけるが、やをらくらくよくて、國元の春をむかへ、又春夏の頃來りなんと、出立ちける馬のはなむけに來るとしの身もたのもしや枇杷の花

京都では、鬼貫と同じく、重頼の門下たりし言水とは、親しく、またその弟子たる方設とも始終往來してゐたのである方設は、後に、金毛と號した。七車に、

金毛亭にて橋といふ題を出して發句所望の時

雨ぞ降る寝て橋のおきてもぞ

鬼 貫

又伊丹發句會にも

北野に詣で、

かゝる冬梅めくみを松平

金毛日待に菊を立添へて發句せよと望みし時

幾露と朝待つ菊の笑顔山

五月十四日金毛が家に日を待つ例有りて、言水、轍士、之白、百丸各打語らひて行きけるに、こよひのもてなしにとて、狩野元信が書きたる人麻呂の像を床にかけて、俳諧興行有りける。予れに發句せよと、乞ひけるほどに即時

明けやすの此のほのくや烏帽子顔

享保七年、九月二十四日、七十三歳を以て、言水は歿した。始め、洛の南郊朱雀野の大通寺に葬つたのであるが、後に、京極の誠心院の、和泉式部の塔側に改め葬つたのである。言水の句集には、鬼貫に關係ある句を發見せないが、鬼貫の方の文献には、前記の如き詞書があるので、多少分る。言水の後を繼いで、言水堂二世となつたのは、この金毛であつた。享保八年、金毛が、言水の一周年を營んだ時、鬼貫に、追善の句を求めたのであつたが、鬼貫は、

其の名ばかりをとよめ置きて、枯野の薄に佛を見し、古人の魂を動かせしは昔なり。

池西言水、俳諧に業をたて、世の中に副ふ。あかれぬ人の數にて、維舟の流れを汲みながら、而も其の舟にも繫がれず。筆の道、學ばずして、佐理道風が假名の手もとを覚えぬ。人よくまじはりをむすぶ。七十の年の後、埋れる苔の上を慕ひて、今や忘れぬ志にあそび、此のいさほしに寄る人は、なにがし方設なり。是もすける心ざしをとらず。誰れかれ月花の語らひ多くして、窓軒端をたのしとす。我れも交りの筵に曲を覚えし友なれば、をかしさあはれさ、心のはしなから、なき跡の石の面こそせんなけれ。

朽ちもせぬ石に袖なし花すゝき

といふ句を贈つて居る。鬼貫が、言水の俳風を評して、「維舟の流れを汲みながら、而も其の舟にも繫がれず」といつて居るやうに、言水の俳諧も、亦鬼貫のそれと同じく、貞門の俳諧を學んで、しかも、その理智的な、言語の遊戯に墮せず、清新にして淡雅なる一風を創始したのである。鬼貫よりは十二歳の兄であるが、鬼貫も、恐らくは、その影響をうけ

たことは、少くなからうと思ふ。

霞みけり比叡は近江の山ならず

尼寺よ唯菜の花の散る徑

風の果はありけり海の音

風の一句によつて、風の言水といはれた程であつた。連俳に於ても、元禄初年頃までは談林の風を帯びてゐるが、元禄二三年頃からは、全く蕉風化して居る。猶、右の詞書の中に見えてゐる轍士は、梅翁の門人で、京都にゐて、鬼貫とも親しく、元禄七年に江戸に下つたが、その以前には、伊丹を訪れたこともあつて、伊丹生俳諧に、

此春轍士坊五畿内俳巡禮とて也雲軒にわせうらにも發句望みやつたさかいでした
私は襲になりぬ呼子鳥

伊丹生俳諧は、元禄五年中夏に刊行せられたのであるから、轍士の行脚も、亦やはり、こ

の頃であらう。

その外、京都での友人としては、北條團水などがある。團水は、元は西鶴の門人で、後には、才鷹の門に入つた人である。西鶴の人となりを慕ひ、七年の間も、その舊菴を守つたので、西鶴の作に擬した小説を、大分書いて居る。正徳元年正月四日、四十九歳にして歿した。

佛の兄の禪扉をたゝかうと思ふとしあまたゝびなり。荆棘出がたに、やうやう
ことしの秋にこそ其の室には入りたれ

澁柿の霜にあふこそうれしけれ

身は團栗の味もしやくりも

これは、「ことしの秋」が、いつれの年であるか分らぬけれども、鬼貫が、佛兄と號した後のことであることは、いふ迄もない。鬼貫が、佛兄と號したるは、元禄十一年である。

その事は、「佛の兄」の序に出てる。してみると、どうしても、元禄十一年以後正徳元年以前のことで、即ち鬼貫の在京中のことである。

雲鼓も、京都の人で、鬼貫の在京時代の友人である。彼は、重頼の門人たる方山の弟子である。後に、薙髮して、迎光菴と號した。また、千百翁との別號もある。

伊丹發句會にも

寒病のわれをおとすな松の聲

雲 鼓

の句が出る。

笠をいたゞき杖を携へて、富士見んと立出でたる雲鼓法師が姿、風になびくと

詠じけん昔におもひよせて、殊勝に侍りければ、一句おくりぬ

風になびくけぶりも夏の雪見哉

京都へは、故郷伊丹から上つてくる人もあつて、

座神京へまゐりて古郷へかへる日

去年からの此花の比又いつか

座神は、逸士傳にも出て居るやうに、伊丹の俳人中では錚々たる人である。兄弟即ち猫信、東明いづれも俳諧に志して、座神は青木貞悟の門人であるが、寶永三年の芭蕉忌には、伊丹派の千及、酒人、東明などと共に、出席して居る。鬼貫自身も、伊丹へ往復したこともあつたと見えて、句選に、

京より伊丹へ行く

水無月や風にふかれにふるさとへ

京より伊丹への往復は、淀の川舟によつたのであらうが、又、度々、京と大阪との間を
行き、したこともあつたと見えて、

大阪へつきて

つめたいにつけてもゆかし京の山

これも、矢張り淀川を舟でいつたのであるが、京阪の間の風物景象をよんだものが多

い。

下り舟にて

稲づまや淀の與三右が水車

伏見から大阪の八軒屋に下る三十石の舟中での吟である。有名な淀の水車は。淀川の水を桃山城中へ、汲み上げる水車であつて、與三右が建造したものである。沛然たる白雨に乾坤爲めに空濛たる時、紫電閃々の裡、淀の大水車を瞥見するといふ、豪壯なる情景を描寫したものである。

春みてる夜難波より船にのりて明ほの淀のわたりを過ぎける程

淀舟や夏の今來る山かづら

ひとり舟にて伏見を下る夜

朧々ともし火みるや淀の橋

今はむかしの秋もなくて

伏見には町屋のうらになく鶉

伏見や深草は、鶉の名所として、歌枕として聞えて居り、かの人口に膾炙して居るところの、「夕されば野邊の秋風身にしみて鶉なくなる深草の里」といふ歌でも知られるやうに寂しい村里であつたのであるが、近世に入つてよりは、京阪交通の要衝となつて、あまり賑やかになり名物の鶉も町屋の裏で鳴いてゐるといふのである。

京に上りて

水無月や伏見の川の水の音

これも京阪往來の時の吟であらう。

五、再び大阪に歸る

彼が、京都より浪速に退隱したのは、享保元年であるといつたが、それは、大江丸のはいかい袋下にも、

一、享保改元の頃は、浪速の俳諧いとさかんなりし

鬼貫 才丸 野波 員九 淡々 祇空 芳室
布門 昭簾 白羽 法策 海音 矩州 瓢水
來山 (圈點を附したるは鬼貫の友人)

とあり、又、淡々のことを記したる條にも、

又俳人にしては淡々なり。能く所の人情を動かしたり。其の頃、大阪にては、才丸、鬼貫、野波、祇空、來川などありし中に、俳諧せぬ人までも、ことしの淡々が歳旦、御聞きなされぬかと申せしほどの事にて、俳諧の孟嘗君ともいつべき男なりし。

とある。いふまでもなく同書は、大阪の俳人大江丸の見聞を録したものであり、しかも、享保二年に刊行せられたものであるから、誠に正確なものである。それで、享保元年までに、已に鬼貫が、京より下つて、大阪に來てゐたことは、疑はない。

さて、この時分には、どこに住んでゐたかといふに、嘯山は、

元文三年戊午秋葉月二日、島の内うなぎ谷わたりの家に病歿せりとぞ

といつてゐる。これより推して考へると享保頃の往居は、鰻谷であつたと思はれる。鰻谷といへば、長堀川の南岸、心齋橋筋東入るところがそれである。然るに異説を立てる者があつて、寺島の方にもゐたといふのである。少し長いが、その資料たる寺島の記を、煩はらず、引用してみよう。

時雨頃こがらしの外に音信あり。二ツ茶やの何がし山晴子なり。きのふ着岸のよし草門に入、まことに風雅の因みわすれずもやと嬉しく、そのことかのもかたる中に、ちひさき盃の數ぞかさなりぬ。晴子持病あり、いまに折ふしはなやむなど聞に、爰に醫あり、其妙術は京の鬼つら傳授せしを我よく知れり。世人もよくしれり、幸哉爰に旅泊せり、尋ても見ましやといふにぞ、かねて聞およぶの所なり、是より伴ひくれかしといさみたつにぞ、菊治柏喜のふたりもいざなひつれて行先きは、寺島といふ所なむめり。浪華津の色里よりは眞西にあたり、大門まで糸を引たるごとし、四五丁には

過まじ、ものにのぼりなどせば、萬のいろあひも見ゆべきなり。河岸にのぞめばむかふへ船いだしまちうけたり。何とやら旅めきて面白し、角田川の都鳥にもものどひかけし、むかしをとこの情、ことさらにおもひ出られて、

けいせいよる瀬しつたか川千鳥

似つかはしくもやと晴にさゝやけば、しらいでもくるしからぬよる瀬なるべしとて笑ふ。こゝらは船作る所にて物音もかしましけれど、なれくはは水鳥などもゆたかにおのがまにく群たり。南は住吉にちかく淡路島のおろしはふところに直に入る。北は此津のさかえ見およぶに果なし。なゝめならざる風景、おのく行船を惜む。

ものくりよ敷寒いに漕な渉人

かぎりありてむかふにあがる。其栖をとふに樹林奥深して、一徑まがふく虎のごとくなる石を踏こゆれば、龍のごとくなる松頭に覆ふ門あり。あなひ人にまかす。白頭の老翁宛然たり。丹竈にたばこを吹あぐれば、けだものゝ雲に吠けむとよみしも思は

く込けるぞや。時を宜して歸るさは暮にちかし。寒さはさむし飛ごとくに其町に入ぬ。

こゝにも石丈といふすきものあり。かれが家にころび入て、わざとならぬ火燵に踏こむ。ひとりふたりも來かさなりてまんざら木男ばかりの酒にもあらず、ほどよき酔のうち明日の事をちぎりくして、三人はもたれあひて西に歸れば、我はものに乗て東にぞ行、夜半の夢しばらく十萬堂にてさめぬ。

二ツ茶屋といふのは、神戸の生田町元町の邊をいふ。その俳人の山晴子が、今宮の十萬堂を訪れて來たが、持病があつたので、來山が、寺島にいゝ醫者がある。その醫者の妙術は、京の鬼貫が、教授したので、有名だから誰も知つて居ることだ、一緒に行かうといつたのである。然るに、之を、「爰に醫あり」を、鬼貫なりと誤解して、鬼貫が寺島に住んでゐたといふ説をたてる人もある。が、左様でない。妙術も、鬼貫の妙術でなく、鬼貫の傳授を受けたその醫者の妙術である。だから、特に京の鬼貫がといつて、今は鬼貫が寺島にゐるのでなくて、却つて京都にゐることを示して居るのである。寺島は、元祿頃の古圖を

見ると、來山のこの文に述べてある通りの位置に在る。今は、松島町となつて居る。要之、余は鬼貫の寺島住居説は、誤なりと斷ずるものである。この頃の句らしいのを一つ二つあけて見ると、

九月盡住吉の神送りに

たれもみな打あふのくや四社の前

住吉にて

縁たつ岸の姫松めでたさよ

この住吉の神社は、堺にあるのであるが、六月の晦日には、火替といふ行事をするのださうである。それは、住吉の御輿を、さかひの津、大小路のみなみなる宿院へうつし、夜になつて、又御本社に還御になるのである。それで、大江丸の、はいかい袋(上)に、大江丸の句として、

みな月晦日の夜更るまで、地車など

引きめぐりてさわぐを、

祭り太鼓いかに鬼つらたしかにきけ

といふのが載つてゐる。これは、いふ迄もなく、宗因の、

ほととぎすいかに鬼神もたしかにきけ

の句に擬したのであるが、鰻谷にゐたとすれば、住吉の祭り太鼓も、よくきこえるから、いつたものであらうと思はれるのである。尙、堺出身の俳人には、之白といふ俳人がある。芭蕉の弟子尙白に従つて學んだ人で、宗雲、無量坊と號して京都に住んでゐた。正徳三年に七十を以て歿した。七車に見ゆるところでは、矢張り、鬼貫の友人である。鬼貫は、その關係もあつて、よく住吉方面へ出かけたのであるかもしれぬ。

雨の梨とまり鴉のかうと鳴

之 白

遠里の麥や菜種や朝がすみ

遠里は、住吉大社の東南、大和川の堤に近い村で、遠里小野村といふ。種油の産地で、

名が高い、この菜種といふのも、即ちそれで、全村油絞りを業としてゐたものである。鰻谷邊からは、大して遠くもない。また、七身に、

一心院常念佛

あら涼し鉦の音死ぬ一心院。

一心院は一心寺であらうが、一心寺は、今宮にあつて、十萬堂からも、眺めやらるゝ所にある。遠里小野も、一心寺も、必ずしも鰻谷にゐなくても行き得るから、これらの句があつたからとて、必ずしもこの頃のものとはいへぬけれども、この邊にゐたのであれば、この句のあるのも偶然ではないと思へるまでである。猶七車に、

今宮まつりに桃賀亭へまねかれて即時

いさましや人の顔照る神祭り

しれる人のもとへ今宮祭に行きて

けふことに枇杷も鈴ふるいさめ哉

などの句があつて、今宮の方にも、よくいつたものとも見える。又、

梅ちつてそれより後は天王寺

難波津に咲くや此花と歌はれた古より大阪は、梅の名所が多い。時代は新しくなるが、蕪村にも、

源八を渡りて梅のあるじ哉

の感吟もあつて、源八の渡を渡れば、今の櫻宮驛から寺島へかけて、廣い梅林があつたのである。複郁たる梅花一たび地に謝してよりは、やがて、待たるゝは、天王寺の彼岸であるといふのである。

何迷ふ彼岸の入日人ばかり

鬼 貫

これも、天王寺での吟である。彼岸の中日に西の空に落つる日を、大阪では、「おはな」といつて拜む習慣がある。平日の夕陽より一層大きいなどもいつて居る。清水の舞臺や、安居天神の境内から拜んで、名號を唱へるのである。人人が、あゝして、たかつて、彼岸

の入日を拜んで居るが、果して、何につけてあゝも迷つて居るのだらうかとの意であると思ふ。

枯蘆や難波入江のさゝら浪

「津の國のなにはの春はゆめなれやあしのわかばをこゆるしらなみ」より思ひついであらうか。

さて、鬼貫の居所なる鰻谷は、また松木淡々が、京より移り住んだ所で、はいかい袋に淡々のことを記して、

大阪島之内ウナギ谷龜亭別荘に歿す

とある。鬼貫が、淡々と交るに至つたのも、此頃からと思はれる。淡々は、芭蕉の孫弟子で、其角の門人である。一體、鬼貫は、其角とも交つて居つて、或時は、其角を訪れたことがあり、そのことは、其角門の貞佐の、桑岡集に見えてゐるといふことであるが、余は未だ一見したことがない。淡々が、江戸より京都に上つたのは、享保の始めである。だが

ら、丁度、鬼貫とは、ゆきちがひになつてゐたのであるが、在岡逸士傳の鶴秀の條に、

享保七年壬寅春二月、洛半時菴淡々翁、來_ニ在岡郷、會_ニ夜霜軒。

とあつて、伊丹をも訪れたこともあり、尙、享保十九年には、大阪に下つて、鬼貫と同じく、鰻谷に住んだのである。しかし、淡々は、俳人としては、俗臭紛々、也有から、

化物の正體見たり 枯尾花

といはれた位、嫌味ある人物であつたが、それ丈け世才に長じ、賣名の術に巧みであつて、虚譽隆々たるものがあつた。前引はいかい袋の記述に觀ても、餘程の人気であつたことが分る。淡白な鬼貫とは、その合ひさうもない横着な人物であつたが、兎に角、鬼貫が晩年の友人であつたのである。淡々句集に、

鬼貫追善、我に十歳の兄也。俳名佛兄といひければ

兄なれや佛なりけり 星なれや

なほ、七車の、

……第二章 鬼貫傳……

同廿日の夜、芳室宅へ行きて

雨水くむ筆の林に鳳の雛

も大阪にての吟であらう。椎本・芳室は、大阪の人で、祇空の弟であり、初め惟中の門人、後には、才鷹の門に入った。甘泉庵、八一山人、舊室、などの別號がある。延享四年に歿した。尙、その外、大阪における友人として、海音がある。句選に、

海音快氣のよろこびに發句を乞れて

遣りはなつ心車に飛ぶ螢

一體、海音は、和泉柿本寺の悦山和尚に参じた、黄蘗宗の禪僧で、その頃は、高節といつて居つた。鬼貫も亦、多少佛教や禪に興味をもち、緇流との交友も多く、閑立和尚、望海庵和尚など、相識の仲であつたから、鬼貫も、その方面からも相知るに至つたであらうが、また、他の方面でも相接する機会もあつたと思はれる。海音は、文學者としては、當時文名噴々たりし近松門左衛門に對峙して、豊竹座の爲めに、數多の淨瑠璃の新作を出し

たことは、改めていふに及ばぬ程であるが、それは、還俗して後のことである。尙契沖に従つて、和歌を學び、鳥路觀契周と號し、俳諧の方では、貞峨庵貞峨と號して居る。又醫術の心得もあつた。兄は、鯛屋貞柳として、狂歌に名高く、父は、貞因といつて、貞室門の俳人である。かやうな關係から、相交る様になつたと思はれる。

その外、談林派の友人では、一禮、文十などもある。一禮は、北村志計であつて、宗因の門人である。

一禮一周忌

足跡のなきを首途に夏の霜

鬼貫

一禮の歿年は、明かでない。高橋文十は、鷺鳥齋と號し、俗に、宇陀野の文十といはれて居る。來山の門人で、もとから、大阪の人であるが、その傳記も判明せぬ。

鳴門集といふ書を文十撰し、卷頭兩吟の歌仙あり

鹿の音や渦にまひこむ浪風

鬼貫

又、馬貞といふ友人もあつた。長野統勝といふ人で、茂林庵、甲子庵、柴石庵、瓢々坊、遠山翁なども號した。野坡の門人である。七車に

馬貞といひし人つくしへ出立ちけるに饒別

ふところの花こそにはほへ夏の雲

馬貞は、豊後の人であるから、國にかへるのを送つたのである。

結語

要之、二十歳前後に故郷を去つて大阪に移り、それより三十歳迄は、或は柳川、郡山或は大野などに往來し或は暫く大阪に歸つて見たりして、孤篷飄々、安からざる生活を送つてゐたものと思はれるが、この間が鬼貫の傳中最も分りにくい時代である。かくして、元祿四五年頃には、京都に移つて、二十餘年間は、此處に杖を駐め、享保元年の頃即ち五十五六歳の頃に、再び大阪に歸り、居ること十餘年、遂に此處に歿したのである。余は始めは全く浪々の生活を送つて、その住居も始終轉々としてゐたやうに考へてゐたのであるが、

段々調べてみる内に、左様でないといふことが、稍々明瞭になつて來たのである。

六、旅行

一、江戸行

芭蕉の足跡殆んど全國に遍きに比較すれば、鬼貫の旅は、其の範圍も回数も、遙かに少い。尤も、鬼貫も行脚したいとの望は、なかつたのではない。禁足旅記にも、「中々あづまの方に旅したけれど」といつて、風雲の志の切なることを述べて居るが、その爲に老親をすて、遠くに遊ぶに忍びず、「心ばかりもぬけてゆ」く禁足の旅記に、纔に雲山千里の旅を想うて、自ら慰むるのであつた。芭蕉などは、何の繋累もなく、「片雲の風にさそはれ」「さらしなの里、姨捨山の月見んと、しきりにすゝむる秋風」に、「簑一笠、飄々として、山澤に行吟する心易さは、いかばかり、彼にとつて羨しい事であつたらう。鬼貫の試みたる行脚は、かういふ譯で甚だ少い。

さて、江戸に行つたのは、數回に及ぶやうである。

第一回——大悟物狂に弔驚動并序といふ文がある。

予丙寅季夏、始赴東武。辭友人驚動于其郷。送且謂曰、吾之所欲見者、惟富士山耳。雖數聞諸往來之客、言大而巳。景象靡詳。請子記來及於我乎。遂別。初秋既卒。惡知永離。今茲秋七月歸于難波。遂至其塚上、愴然而嘆曰、難矣生也。將與誰語之。但雖其人無、言猶在耳。我豈欺於死哉。滌翰荻露、效於繫劍云。

囉々哩居士鬼貫

丙寅は、即ち貞享三年で鬼貫二十六歳の時である。酒竹氏の全集など、普通の刊本には——印の部分落ちてをるので文意疎通しかねる。貞享三年六月より、七月までの一ヶ月餘りの旅行であつたのである。始の字があるので、第一次の旅行だといふことが分る。驚動は、伊丹の俳人で、獅々吼、形役菴とも號し、宗旦の門人中で、頭角を表はし、野梅集を撰するの志があつた。鬼貫が、この江戸に下る時伊丹で別るゝに當り、富嶽の景象を見て

來て詳かに話して貰ひたいといふ事であつたが、鬼貫が江戸から歸らない間に、そして野梅集が完成しない中に、七月晦日歿した。辭世に

根は常盤しばしもみぢぬ松の蔦

の句がある。行年二十二歳。伊丹の墨染寺に葬つた。一周忌には、宗旦がその志をついて、野梅集を完成し、墓前に手向けたといふ。大悟物狂には、序の次に弔文及びこの辭世の句を立句とした百韻が載つて居る。今は、直接の關係がないから、こゝには省く。

第二回——七車に曰、

九月八日江戸に下りける時二十日あまり八とせむかしの秋をかさねてことし又裾野にむかふ。

その秋のおぼえはなかば富士の空

また、禁足旅記に曰、

北窓の月は遠山の曉にそむき、南面の秋日は軒をめぐることに早し。われ心あらばめで

たき閑居なるめれど、賤しければ樂みの思短く、鬱鬱たる秋のなかなか吾妻のかたに旅したけれど、用なきに身を遠く遊ぶこと、暫く老親の爲におもければ、こしかた見盡したる所々、居ながな再廻のまなこを及ぼし、日々心ばかりを脱けて行かば、我願も足り不孝にもあらずと思立ちぬ。

ことし又といひ、再廻のまなこといつてあるから、この旅行が、第二次の旅行だといふことが分る。八とせのむかしといふのだから、貞亨三年より八年の後、即ち元祿六年に當る。(鬼貫三十三歳)因に云ふ、禁足の旅記は、元祿三年に成れる者で、想像の旅記である。

行秋や昔をからで富士ひとり

箱根山にて古郷を思ひ

ふるさとを招くか尾花二子山

は、この時の作である(七車)。そして次の句も、この時の句ではなからうか。

江戸にて大としの夜いさゝかの神の道を受つたへて

あらたのし十種はじめに日の鏡

若し、左様だとすると、秋江戸に下り、長く滞在して居たやうで、又次の句によると、江戸で越年したのかとも思はれる。

石町旅宿にて上野のかねを聞て

遠うくるかねのあゆみや春がすみ

それから、七車の冬の部の

よし原にて

寒からぬ姿夜なき城の花車

江戸に在けるととき安藤何がしどのの館にて

雪霜に程こそ見ゆれ心花

もこの時の吟であらうか。

第三回——等一回は六月、第二回は九月であるが、更に之とは別に試みられた旅がある

と思はれる。それは、七車に、

春のうち吾妻の方にくだりなんやといふを聞て溪鶯子がもとよりむまのはなむ
けすとて唐扇に發句をそへておくりけるほどに心ざし淺からねば脇句をつくり
てよろこびをのべぬ

いちよい日末廣御覽春の富士

溪鶯子

人の詞の花をはな笠

鬼貫

大阪へ行て東行興行

草の花の水にまかせて根をひかへ

但、年次は、第二回以後の事であらうと推察せらるゝのみである。

以上三回の江戸行の外に、江戸行を試みたと思はるゝのは

江戸より歸京の年

朝紅や水うつくしきはつがすみ

と七車にあるそれである。これでは、春歸つたことになるが、春かへつたのは、第一回、第三回には、當てはまらぬ。故に、全く別の旅行であらう。或は、第二回の東下の歸りかとも思はれぬでもない。何故かといふに、歸京と詞書にいつてあるからである。第二回の東下の頃は、京都にをつた様である。この第二回は、秋東下して、其の秋、歸京したとも思はれないのは、東下の途で、既に「行秋や」の句があつたからである。この第二回の事とするといふと、此句の「初がすみ」とあるのが、「遠うくる」の句に比較して、同じく春ではあるが、其の時期が一致しないやうに思はれる。それが、少し氣がゝりになるのである。

猶、今一つは、

江戸より京に歸りて

秋立つや富士をうしろに旅歸り

此は、第一回の江戸行の歸途かとも思へるが、第一回は、難波にかへつたのであるから、

「京にかへりて」の詞書に一致しない。だから、どうも別の旅行としか思はれぬので、江戸行は、まづ前後五回と見て宜からう、之を表にしてみると、

	往	出發地	復	歸着地
第一回	貞享三年六月	難波	同七月	難波
第二回	元祿六年秋	京都	同七年春	京都
第三回	? 春	?	?	?
第四回	?	?	春	京都
第五回	?	?	秋	京都

江戸では、鬼貫の知人としては、嵐雪がある。尤も、嵐雪の方の文献には、あまり詳しくも出て居ないが、玄峰集に、

冬の日客をもてなす

君見よや我手いるゝぞ莖の桶

とある。そして、元祿三年の犬居士にある禁足旅記の十月二日の條に、

江戸に入て日本橋を渡る。

いつもながら雪は降りけり富士の山

嵐雪あらしゆきに行いて宿しゆくす。去年こぞの秋あきは、瓠か界かい此こ庵あんに來きて夜よ長ながく、ことしの春はるは、伴た自ぢが

日ひ永ながうして、我わが事こといふに短みじかく、又また歸かへりていふに長ながし。互たがひに笑わらて夜よもすがら兩りゆう吟ぎん

す。句は其その俗ぞくにむかふ。

君見よや我手いるゝぞ莖の桶

嵐雪

腹はらによはる上うへかたの腹

鬼貫

叡覽えいがんの月つきのあまりの影かげにゐて

同

年貢ねんぎんはからぬをのが除のぞ地ぢ

雪

鶴つるの聲こゑ菊きく七尺しちしゃくの詠えいあり

同

お國くに隱ひそ居かの道みち廣ひろき山やま

貫

(下略)

瓠界は、北村宗俊で、宗因の門人である。大阪の人ではあるが江戸に居つた。「去年の秋は、瓠界の此の庵にきて」とある。難波順禮の著がある。併し、この元祿三年頃は、大阪にゐると見えて、同じく、禁足旅記の、九月二十三日の條に曰、

瓠界來りぬ。いざとて行く。彼も我も、骸は津の國に置きて、心は今關の宿のほとりに遊ぶ。野の草の茫々として、かれかゝりたる中をみれば、

雜 歌仙

哀れさに打くだきけりされ頭	瓠 界
あぐらかき居て杳作る老	鬼 貫
珍敷星見付だす初嵐	同
あたら月夜の踊崩るゝ	界
秋の宿べちに榮なきお客連	同

念かけてくる里の正宗

貫

(以下略)

一體、禁足の旅記は、空想の旅記なのであるから、この連俳も、鬼貫が勝手につくつたのであるやうに考へられるが、一方嵐雪の句集で見ると、君見よやの句を立句とした前記の歌仙が出て居つて、元祿三年、鬼貫が江戸に來りし時の作であると註してある。してみると、全然、鬼貫の想像の旅記とも思はれないやうであるが、恐らく百萬旨源の思ひちがひであらう、其袋の連俳に鬼貫が句をつけたのである。(逸士傳參見)

二、美濃の加納

七車に

美濃國加納に行ける時

お多賀への道もおいその夏木立

此は、江戸へ往反の途次の事かとも思はれるが、夏の旅は、第一回の江戸行のみである

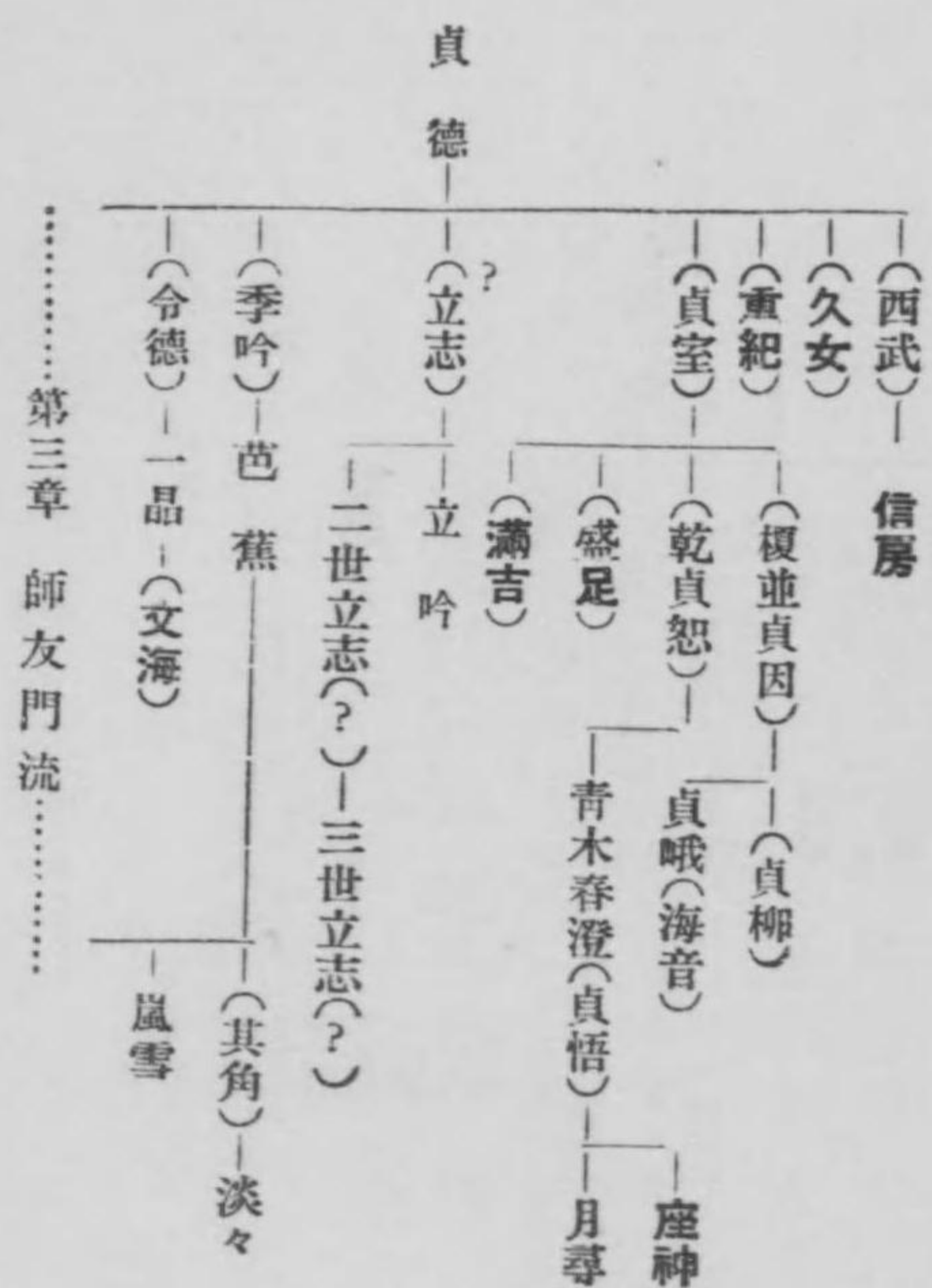
が、行李匆々の旅行で、加納滞在の餘裕があつたやうにも思はれない、詞書の趣では、唯立寄つたといふのでもなさうである。恐らくは別の旅行ではあるまいかと思ふ。七車に、

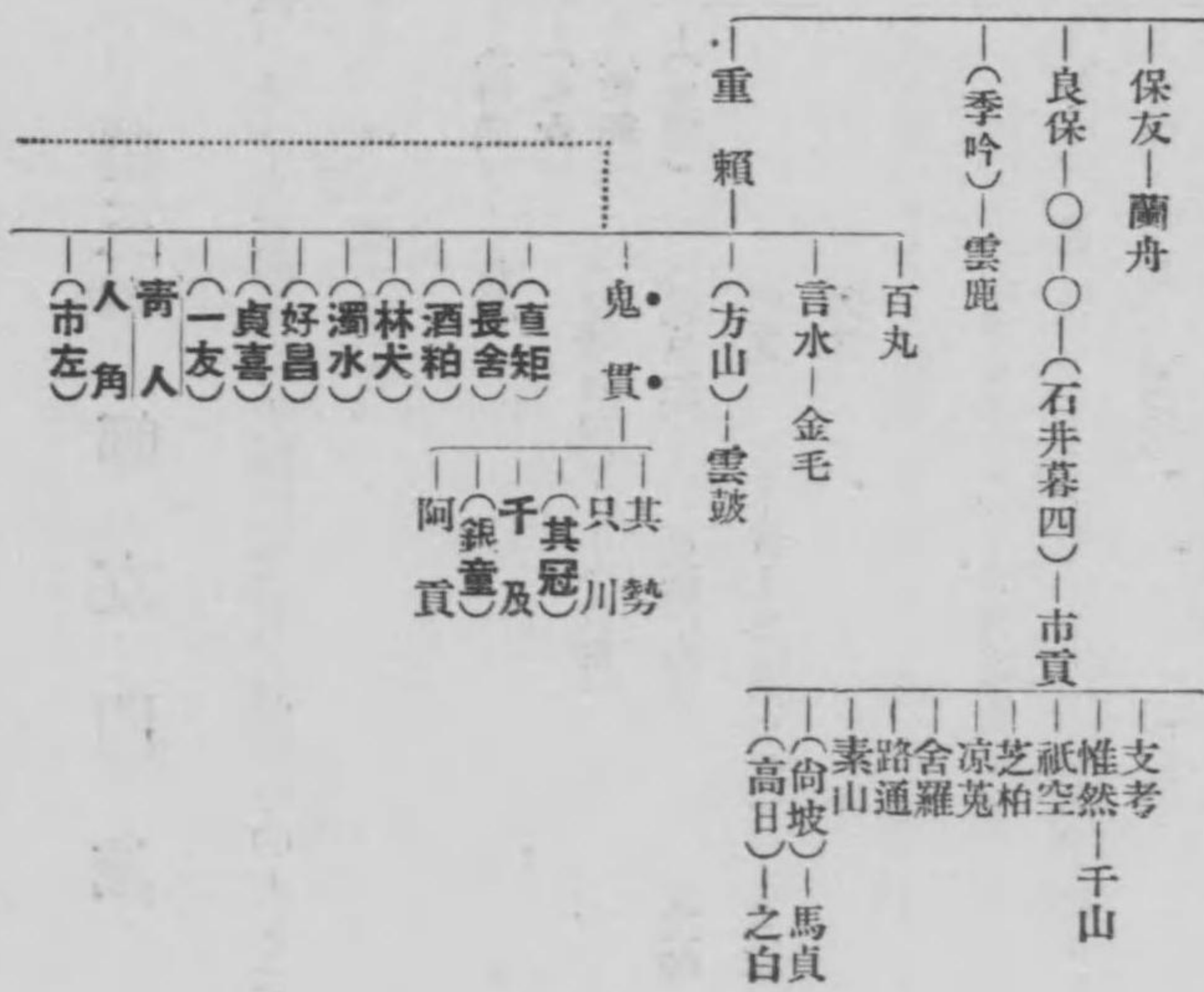
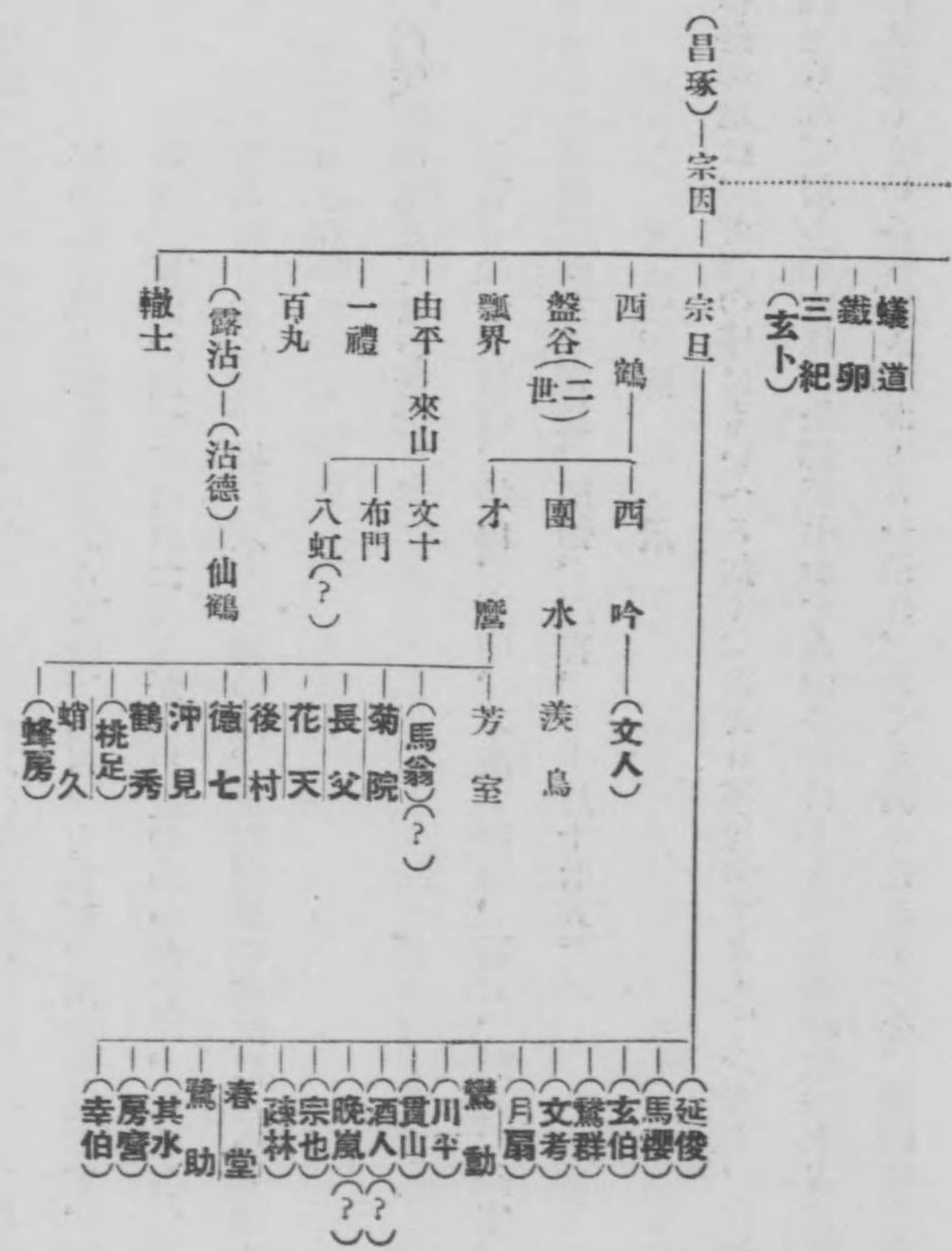
加納にしばらくありける時野々山内匠にまねかれしに

たのもしや何も加納の青田時

第三章 師友門流

逸土傳、及び鬼貫關係の文書に鬼貫が直接その人とさしてゐる人々を轉合して、表を作つてみると、次の様である。





注意。右の系圖の内、細字の分は、逸士傳以外の資料に鬼貫が書いて居る俳人で、太字のは、逸士傳に出て居るものである。そして、兩者を通じて、()を施したるは、鬼貫が知つてはるたらうが、鬼貫のかいた者に、その名の見えないものである。(?)は、推定。(——)印のは、鬼貫關係の文献にもあり逸士傳にも出てゐるもの)

門流の明記してない者。

長賢、塊子、猫信、妙山、東明、耳廣、鴨峰、石天、鶴秀、長宅、竹直、烏信、宗純、政女、良泉、周伯、江宮、——計十七人。

一、師 承

伊丹の地は、七車の序にもいへる如く、「古より連俳のすき人」が多く、在岡逸士傳に、載録せられて居る俳人は、全部で七十七人の多きに上る。元祿時代、上方文學の中心たる大阪に近しいものゝ、かゝる一邑に、かくも濟々たる多士を、輩出せしめ、元祿の俳

壇に於て、獨特の俳風を宣揚するに至れるは、蓋し、俳諧史上の一偉觀と稱しても、溢美の言ではあるまい。而して、伊丹には、俳士の會合する所も出來てゐたと見えて、在岡逸士傳の千及の條に曰、

(千及) 性穎脫不羈、而有出群才。一朝爲香塵堂主。堂者、邑之誹林菌也。

誹林菌といふのは、俳諧興行などに、俳人の會同する所であつて、談林十百韻に、俳諧談林といつてあるのと同じことであらう。猶、逸士傳の馬翁の條に、

馬翁者不知郷土氏族。居處無常。寄跡於風雲。偶寓有岡之一蓮社。

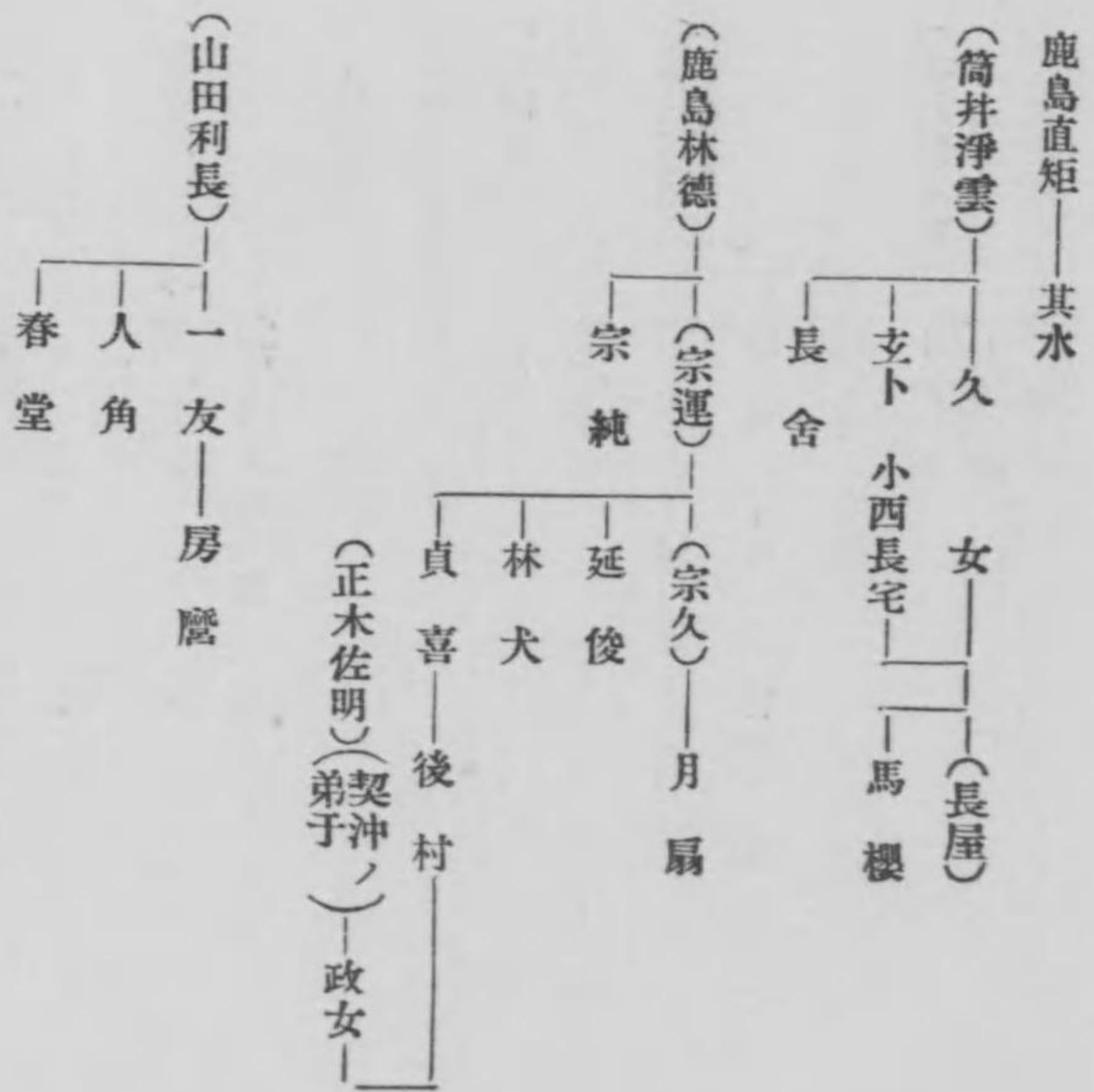
この一蓮社も亦、所謂誹林菌の一つであらう。

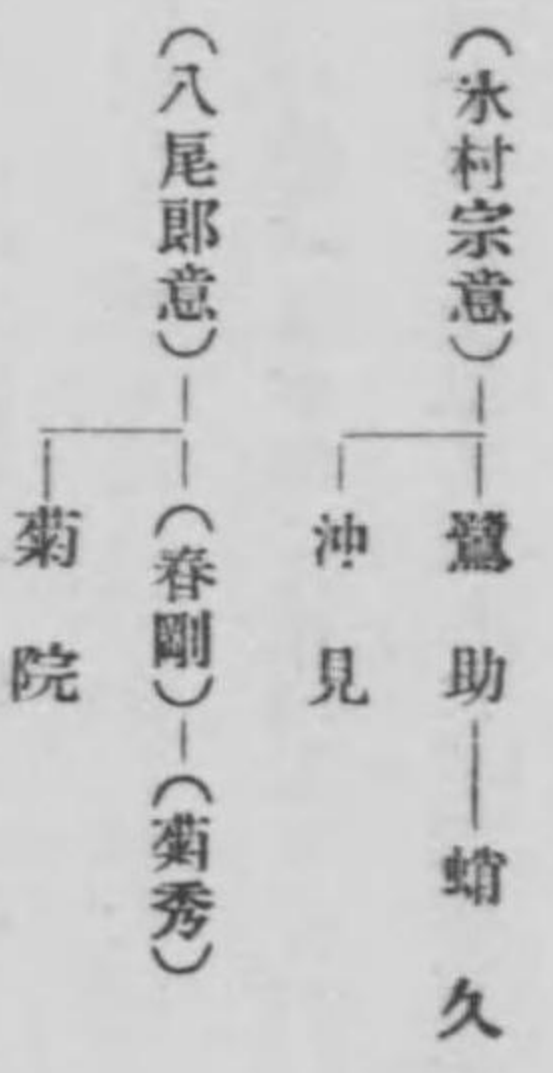
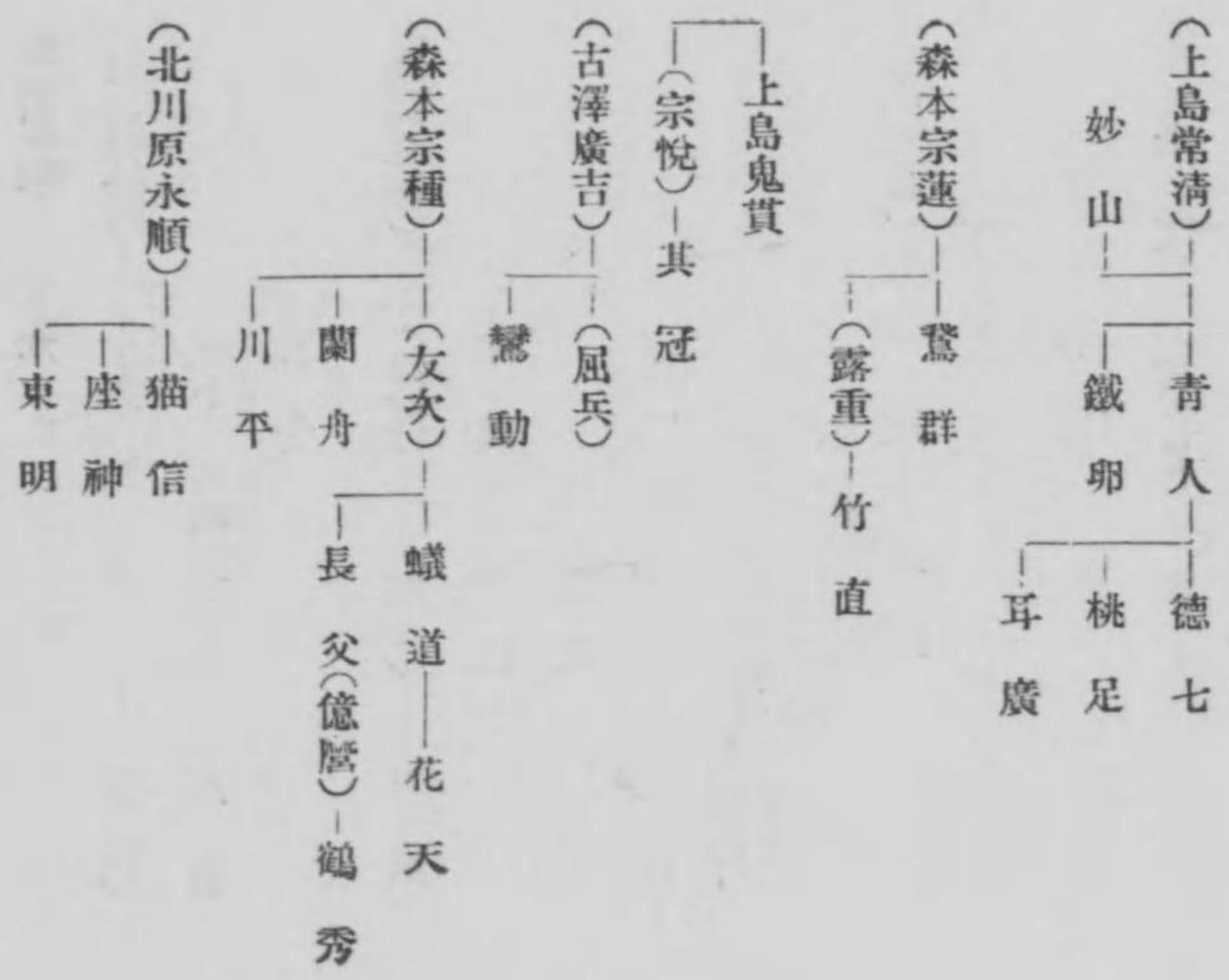
今、在岡逸士傳によつて、檢してみても驚くことは、伊丹の俳人の七十七人の内、約半數以上は、親子、兄弟、夫婦、叔姪等、一族一門が、俳諧に趣味をもつて、二代も續いて、俳人を出して居るといふことである。元來、藝術とか文學とかいふものは、趣味に基くものであるから、父好めりとして、子必ずしも好むものでもなく、兄嗜めりとして、弟必ずしも

嗜むものでもない。然るに、伊丹における模様をみると、筒井家は五人、森本家上島家は六人、鹿島家は七人を出して居るといふ有様なのである。斯様な事は、外には類がなからうと思ふ。いかに俳諧が盛であつたかが分るのである。單に、その人だけの名が出てゐる俳人を擧げると、

- | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 長賢 | 信房 | 酒粕 | 濁水 | 好昌 | 市左 | 玄伯 | 文考 |
| 塊子 | 月尋 | 宗旦 | 馬翁 | 貫山 | 酒人 | 文海 | 晚嵐 |
| 宗也 | 千及 | 麥秀 | 疎林 | 三紀 | 重紀 | 蜂房 | 鴨峰 |
| 幸伯 | 石天 | 文人 | 銀童 | 鳥信 | 周伯 | 滿吉 | 江宮 |
- (計三十二人)

更に、父子兄弟夫妻いづれも俳諧を嗜んで逸士傳に出て居る俳人をあけると、次の如くである。(計四十七人)





(増尾宗壽)(宗因門人) — 良泉

右の表の内、括弧に入れたのは、逸士傳の目次には、のつてゐないが、本文にはあつて、はその血統を知るには都合がよいので、特に記入したものである。

次に、此等の俳人を、その俳系によつて分類してみると次の様になる。

貞徳門……………二	貞室門……………二
重頼門……………一八	保友門……………一
一品門……………一	鬼貫門……………五
貞悟門……………二	宗旦門……………一八
西武門……………一	才鷹門……………九
西吟門……………一	

六十人
(其他不詳十七人)

之によると、重頼系の十八名と、宗旦、才麿等梅翁系の約三十名が、最も多いのである。之によつて伊丹の俳壇の一斑を推すことが出来る。

抑も、この伊丹風を創めたるは誰ぞといふに、生川春明の説によれば、俳家大系圖に記せるごとく、松井宗旦、その人である。春明は、「伊丹風の祖なり」と註して居る。宗旦は、本姓は、池田氏。通稱俵屋吉兵衛。大野酒竹氏に依れば、延寶七年の俳諧名取川にも、伊丹の人にて池田氏とあるさうである。其の先は、京都の人である。重頼に従つて俳諧を學び、その奥秘を極め、延寶二年の春、有岡に移り住み、草庵を結んで、也雲軒と號した。夕雨、兀翁、依梧子などの別號がある。天性甚だ酒を愛し、芳醇を花月の下に酌んで、門人に講義を授けたといふ。素より學は和漢を兼ねて、或は老子莊子などを講じ、徒然草、方丈記の類なども説いてきかせたので、學徒雲集、門葉甚だ盛であつた。其の中、古澤鸞動、木村鷲助は、殊に傑出してゐた。かくて、宗旦、也雲軒に在ること二十四年、元祿六年九月十七日を以て歿した。行年五十八歳。伊丹の攝取山光明寺に葬つた。法名は、法屋

宗旦居士。

辭世の歌に曰、

世の中はたゞ瓢箪の大鯰

抑へく／＼てにけて往にけり

宗旦の墓は、光明寺にあるべき筈であるが、今は探しても見當らない。宗旦の句も殆んど見つからぬが、たゞ一つ俳諧古選に、

よしや身は申合する罌粟坊主

宗 旦

とあるのみである。談林風の句だ。宗旦の七回忌には、この辭世に因んで、鬼貫の追悼の句がある。大悟物狂に出て居る。曰

瓢箪の鯰いんでいづくにかある。なしといはんとすれば、水は流れてちん／＼、
風は吹いて颯々。

死や生や七つになりし石佛

鬼 貫

また、十三回忌には

也雲軒宗旦懷舊 常に思ひ常にむかふめぐりて十三のことしになれば
さもこそも香さへ菊さへいつもさへ

鬼 貫

又淡々の宗旦像の贊に曰、

樂天元眞を呼んで元白と云ふ。庵主今日一人の元白なり、雪花を愛し寒夜に月
在り。

散るを待つ 佛清しおち葉ごろ

とある。

宗旦の著篇、世に行はれし者、無盡經、野梅集、か様に候ものは、鶉眞似、遠山鳥など
の外、宗因の白つゆや無分別なる置所を立句とした兩吟無分別、木兵、百丸、鬼貫、鐵齒
との連句なる籠拔、などがあるさうであるが、未だ管見に入らぬ、俳諧辭典などに、茶人
小栗宗丹の傳説と混同して居るのは誤である。兎に角、宗旦に關しては、まづ以上に述べ

た以上には、分つて居らぬ。

宗旦は、重頼の門に入つて居たことは、逸士傳に出て居るから、確かである。併し、逸
士傳には、宗因の門流を汲んだといふやうなことは、少しもいつて居らぬ。然るに、俳家
大系圖には、宗因系に引いて、伊丹風の祖なりといつて居るが、此は、思ふに、鬼貫等と
同じく重頼にもつき、宗因にも學んだのであるに相違ない。宗旦の名も、宗因の一字から
取つたのであらうと察せられる。故に兩方から系をひいて居ると見るのが至當と思ふので
ある。然らば、鬼貫は、宗旦とは、相弟子といふことになるが、勿論宗旦が先進で、宗旦
の歿年には、鬼貫は三十三歳であつた。兎に角、伊丹にこれだけ多數の俳人が出たといふ
のか、全く宗旦の孳乳の恩によることである。

但、宗旦の作品は、われ／＼は見たことがないので、どんな俳風であつたかは、分らな
いが、宗旦の弟子達の句によつて見れば、古風の俳諧の領域を蟬肌して居るものと考へら
れる。言語上の滑稽を弄した迹は殆んど見られない。思ふに、重頼と宗因との俳諧を併せ

呑み、更に新味を出さんとしたるものが、伊丹風の俳諧なのであつた。

奈良づけに女子酔ひけりひしの餅	鶯	助
此花が桃になるかや花の桃	青	人
夕立に見しや二王の臍の穴	蟻	道
砧うてよ明日叡山へ便り有り	春	堂
夕顔や反古障子の機明り	麥	秀
群儲の小鮎に放つ礫かな	徳	七
朝日影水に矢を射る小鮎かな	月	尋
はやもなけ東は雨のほととぎす	京	桃
荷もなき汀に眠るかもめ哉	月	尋
日の影も瘦たる窓やかへり花	渡	村

此等の佳什、いづれも温雅にして、奇偏の調なく、清新にして、摯實の風あり。蕉風の

句集中に挿入して置いても、容易に判別することは、出来ないであらう。宗旦の弟子では、延俊、馬櫻、玄伯、鶯群、文考、月扇、鸞動、川平、貫山、酒人、晚嵐、宗也、疎林、春堂、鶯助、其水、房麿、幸伯などがある。

鬼貫は、この鬱然たる俳諧國に生れたのであるが、その師としたるは、矢張り、重頼と宗因とであつた。鬼貫曰、

十三歳の頃松江の翁をまねきて、流水を汲んといふより、明暮此の道に心を盡しぬ。
(七車序)

それがし八歳に成ける頃、いなけなる發句しそめてより、十三歳の比、松江維舟に師のちなみをむすびて、かの翁の古風をまなび、此道に心をいれて、不斷獨吟の百韻をつゝり、その比名に立る古老のかたへ送りて、點をこのみ見ると、いく卷といふ其數を知らず。(ひとりごと)

なほ、はいかい袋にも、維舟の條に、「宗因鬼貫も此門學俳諧」とある。因に云、宗因